気づいたらしずかちゃんだったので道具を借りパクしてみた

さわやふみ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前半はほぼタイトル通りです。

※大人向けな内容になっておりますのでご注意ください（’ω’）

目次

しずかちゃん堪能編
1．気づいたらしずかちゃん 1
2．初日 8
3．心変わり 16
4．道具の検証 23
5．小金稼ぎと初経験 30
真相編
6．未来の異変 36
7．疑惑 43
8．真相 49
9．決戦前夜 55
10．夢の中の攻防 64
11．対峙 72
12．未来へつなぐ 80

しずかちゃん堪能編

1．気づいたらしずかちゃん

『ピンポーン』
　ご飯の香り漂う夕暮れ時、古めかしい木造一軒家にチャイムの音が響き渡る。
「誰かしら？のび太～出てくれる？」
　居間の奥からリズミカルなまな板の音と共に間延びした声が聞こえると、ダルそうに階段を降りる音がして、玄関のドアがソロリと開いた。ドアの隙間からはメガネをかけた少年が冴えない顔をのぞかせる。
「あ、のび太さん。ドラえ……ドラちゃんいる？」
「し、しずかちゃん!?どうしたのこんな時間に？ドラえもんなら上にいるけど上がってく？」
　可愛らしい女の子の声を聞いてメガネの少年は急にテンションを上げて女の子を招き入れようとする。
　しかし、女の子は対象的に淡々と言い放つ。
「もう遅いしちょっと用があるだけだから」
「そ、そっか。いま呼んでくるから待ってて」
　メガネの少年が階段を急いで駆け上がっていくと、しずかちゃんと呼ばれた少女はゴソゴソと肩にかけたカバンを漁りだす。そして、機械とも言えぬダミ声が聞こえてきた瞬間、少女はカバンに手を入れながら構える。
「あれぇ？しずかちゃん僕に何か用？」
　メガネの少年の次に家から出てきたのは、人の形さえしているが寸胴で背は低く足が短い上に頭が異様に大きな青いロボットであった。
「あ、ドラちゃん！」
　外で待っていた少女はその外見に大して驚く様子もなく、チラリと周りを確認すると自然に会話を始める。
「この間、借りていたひみつ道具を返しにきたの」

「ええ?道具なんてしずかちゃんに貸してたっけ……?」
青いロボットは言われたことが記憶にないらしく困惑しているが、少女は平然と続ける。
「覚えてないの?それは良かったわ。想定通りよ」
「ど、どういうことなの?」
少女は狼狽えているロボットをよそにカバンからメガネを取り出し顔にかけた。
その様子に青いロボットの表情はさらに青くなっていく。
「そ、それは喋った相手に催眠術をかける『さいみんグラス』じゃないか!何でしずかちゃんが持っているんだい!?」
「ふふふ、ドラちゃん。その台詞3回目よ?それより、用意しておくようにお願いしていた『アンキパン』3斤を渡して頂戴」
少女はメガネを通して青いロボットの目をジッと見る。するとどういうわけか青いロボットもこれまでの動揺ぶりとは打って変わって素直にお腹にあるポケットから食パンらしい物体を取り出し手渡したのだ。
「ありがとう、ドラちゃん助かるわ。最後に『メモリーディスク』を使って、いま話していた内容の記憶を消してね」
青いロボットは少女に言われるがままにポケットからディスクを取り出し、頭の上に乗せた。
そして、しばらくするとロボットはキョトンとしてから急に驚く素振りを見せる。
「あれ?しずかちゃん!何でここにいるの?」
「なぁに?ドラちゃん今まで喋ってたのに大丈夫?あ、頭に何か載っているわよ」
少女はクスクスと無邪気な笑みを浮かべると先程まで青いロボットの頭に乗っていた『メモリーディスク』を取り、さり気なくロボットのポケットに入れた。
青いロボットは混乱しているようでポケットに何を入れられたかまで気が回らないようだ。そこに少女はたたみ掛けるように喋りだす。

「相談にのってくれてありがとう。ピアノのお稽古に行かなきゃいけないからもう行くね」
「う、うん。またね」
青いロボットは背中を向けて去りゆく少女の姿を釈然としないまま見送ったが、少女の口元が笑っていることに気づくことはなかった。

遡ること1週間前

「……」
俺はカーテンの隙間から差し込む光とスズメのさえずりで目を覚ました。
辺りにはフローラル系の優しい香りが立ち込んでおり実に気持ちのいい目覚めであったが、何かがおかしい。
寝起きのせいか頭がボンヤリとしているが、真っ先に疑問が生じている。
（ここは……どこだ？）
どうやら朝のようだが、辺りを見回すと光が届かない薄暗い一室の片隅には机やら棚があり見覚えのないぬいぐるみが所狭しと並べられているのだ。明らかに自分の趣味ではない。
（昨日は酒を飲んだっけ……）
真っ先に疑ったのは昨日に記憶を忘れるほどお酒を飲んだかどうかだ。しかし、どうも昨日のことを思い出せない。というより思い出せない範囲が大きい。
「え……俺は誰だ……？」
口に出してみることで異常な状況であることを再認識すると共に、

さらに疑問が沸いてくる。
「こ……声が……どういうことだ……!?」
声質に違和感があるのだ。イメージとかけ離れて高すぎる。まるで小さな子か女の子が喋っているような可愛らしい声だ。
俺はこんな声だったか？　いや、絶対に違う。
でも肝心な自分が誰かを思い出せないのだ。
まるで思い出すことを拒絶するかのように頭の中が霞がかってぼやけている。

記憶喪失――

まさか自分の身にこの言葉が当てはまることになるとは。
動揺を隠せないまま寝ていたベッドを降り、暗さに慣れてきた目で手がかりを探す。
（落ち着け……。寝ぼけているだけだ。机に何か自分を思い出す物があるはず）
綺麗に整頓された机の引き出しを開けてノートやら文房具を漁ると共通して見覚えのある名前らしき文字列を発見する。
（源……静香……？）
寝起きから心拍数がどんどん上がっていき、最高値を更新したのではないかと思わせるほど心臓の鼓動が大きく早くなってきた。
そう。俺はこの名前を知っている。
あの国民的漫画に出てくるヒロインの名前だ。
「しずかちゃん……」
そして声もしずかちゃんだ。
なるほど。これはあれだな。
キャラクター体験型ＶＲアトラクションもついにここまで来たのか。ご丁寧に自分の記憶を混同させて没入感も醸し出している。
しかし、リアリティを出しすぎでしょう。俺は落ち着いてきたけど、自分自身の記憶がなくなるとパニックになる人がいるんじゃないか？

「すみませーん、ちょっと酔ってきたのでいったんストップしてもらっていいですかー?」
心なしか吐き気はあったし、自分が誰か分からないなんてモヤモヤした状態が継続していることに不快感があったので、しずかちゃん体験アトラクションを停止してもらうことにした。
が、反応はない。

「ステータスオープン!ヘルプON!タイム!」
転生憑依物にありがちな掛け声を発してみるも状況に変化はなく、外のスズメの鳴き声が聞こえるだけだ。

(待て待て待て、これ何かしらクリアしなきゃいけないゲームなの?つーか、なんで俺はしずかちゃんの生活を体験しているんだ?)
自分が好んでこのようなアトラクションをやるとは思えないし、そんな年齢でもない。年齢?
そういえば年齢も思い出せない。
このような時は強制停止でしょと言わんばかりに頭に両手をあててみるが、何かをかぶっているわけでもないようだ。
(これどういう仕組みなんだ……)
ベッドに腰掛け、もはや停止するまで待ちに入ったが、そんな自分をあざ笑うかのようにしずかちゃんの部屋は朝の明るさを増していき時を刻んでいるようだ。
リアルすぎる。
体験型ならもっと映画のワンシーンとかあるでしょ。寝起き場面とかって選んだ俺もだけど作った人も変態気質あるような。
その時ふいにある言葉が自然に頭の中に思い浮かぶ。
『同期100%完了』
それと同時に今まで感じていた自分が自分の体を操作しているような、幽体離脱をしかかっているような奇妙な浮遊感が消え、スッキリしていく感覚。まさに良い目覚め状態とも言える気持ちになっていくのが分かった。

（同期……？あれ、吐き気も消えた……。自分を思い出せない不快感も和らいでいる）

体も軽い。

ピョンと飛び起き、目に入った縦長の鏡を覗くとしずかちゃんが写り込んでいる。

（うわぁ～……パジャマ姿のしずかちゃんだ。改めて見てもカワイイ。髪を結んでないのも色っぽいな）

さらりとしたストレートの髪をまとったしずかちゃんはいつもと違う雰囲気を醸し出しているのだ。

男の性（さが）なのかその詳細なボディのほうにも自然と目が行く。ツンとふくらみかけた胸元に、抱き寄せたくなるようなS字ラインの腰つきはパジャマに張り付いた小ぶりなお尻をより一層引き立てている。

（小学5年だったよな。もう完成しかかってんじゃん）

触ってみたいがこういうアトラクションは画面を見物している人もいるだろうから堪らえるのが無難だろう。

と、まぁ個人的にはもう堪能しきったからいい加減ゲームを終わらせて欲しくなってくる。

最低ノルマとして玄関をでればいいのか分からないが、適当に歩き回ってみることにした。

考えてみればしずかちゃんの家って裕福であることしか分からなかったので、広くて地味に迷う。

作り込みに感心しつつも玄関を発見し、ガチャリと重厚なドアを開けてみるが、視界には眩しい外界が広がるばかりだ。

（いつ終わるのだろうか……）

相変わらず自分が誰か思い出せないし、しずかちゃんの記憶もない。

ただ、他人感はあるものの、自然体として何となく自分がしずかちゃんであることが成り立ち始めていることに気がつく。

もはやしずかちゃん自身が突然記憶喪失となりその拍子で内なる男前の人格が表に出てきてしまったのではないかと思うぐらいだ。

たしか漫画でもしずかちゃんはのび太と体が入れ替わった時に男として活き活きと活動していた。元々しずかちゃんの性格は男勝りなのだ。

「……」

いくら待てども何も状況が変わらない。

何をすれば解除されるのか、記憶が戻るのか分からない。

しかし、取り敢えず受け入れざるを得ないようだ。根拠はないが自分は今後しずかちゃんとして生きていくことになるのだと。

ただ……所感としてはそれほど悪くはない。

漫画の中でも紅一点のしずかちゃんはヒロインということもあって美少女でありお金にも困っていない家庭の育ちだ。そして何よりこの世界にはあのドラえもんがいる。

何をしても冴えないのび太君を助けるために22世紀の未来からタイムマシンに乗ってやってきたネコ型ロボットだ。

しずかちゃんはのび太君の友達ということもあり、『タケコプター』や『どこでもドア』など子供の頃に夢見たドラえもんのひみつ道具にお目にかかるチャンスが非常に高い。

道具があれば記憶喪失すら取るに足らない問題となり解決出来てしまうかもしれない。

そしてそれ以上の恩恵もすぐに思いつく。

この時、自分はこの状況を楽観視し、むしろこれから訪れるであろう出来事（勝ち組生活）に対して期待に胸を膨らませていたのであった。

2. 初日

　時計を見ると7時30分をさしている。
（あ!学校に行く支度しないと!）
　誰かに指摘されたわけでもないが急に思い出す。
　小学生と言えば学校、という無意識な発想からかもしれない。とにかく急がないと遅刻してしまう。

　ただ、学校に行くには……着替えなければならない。

　タンスの服の位置が分からないこともあるが、問題はパジャマを脱がなければならないことだ。
　漫画で見かけるシャツとスカートをデザイン関係なしにタンスから探し出し、いざパジャマのボタンに手をかけるが手が進まない。
　タンスを漁ることとさえ変態的と感じたのに、自らの体ではあるものの小学5年生の女の子の服を脱がすのはやはり抵抗があったのだ。
（この感覚……。やはりどう考えても俺は男だ。しずかちゃんの人格ではないのだろう）
　気を使って、しずかちゃんの体を見ないようにしながら何とか外出着に着替え始める。
　これはまだしずかちゃん体験型VRであることの可能性を排除しきれなかったことも起因していた。
　もしもハァハァ言いながら女の子の体を着替えさせている俺が外部モニターなどに映し出されているのだとしたら現実社会に堂々と復帰出来ないからだ。
　シャツが胸の先端に擦れただけでも変な気持ちになる。
　この子はもうブラが必要ではないのか。
　と余計な事を考えながらなんとか着替えを済まし、髪の毛をアンバランスながらも2つ編みのおさげに結ぶ。髪型は楽で良かった。
　そして居間に行くと、しずかちゃんの両親が既に朝食を食べていた。

「あら、静香。おはよう。今日は起きるの遅かったわね。具合でも悪いの？」
「お、おはよう……。大丈夫」
　漫画で何となく見たことがあり既視感がある母親であったが、ほとんど記憶がなく初対面に近い感覚だ。
　父親に至っては漫画でもコロコロ容姿が変わっていたこともあり全く見覚えがなかった。
　朝食を食べている間も会話こそなかったがかなり気まずく、とにかくすぐにランドセルを背負って外に出ることにした。
「あら？ もう行くの？ 朝風呂も入らないなんて……」
　去り際に聞こえた母親の台詞にハッとする。
　そうだ。風呂に入りたい。
　なぜか分からないが無性に風呂に入りたいのだ。風呂好きなしずかちゃんの体が欲しているとでもいうのだろうか。
　時間もないため、湧き出る欲求を抑え無理矢理に玄関を出る。
　しかし、問題は続く。

　学校は……どこだ。

　記憶がないからたどり着けるわけがない。手元に携帯もなく調べることも出来ない。
（取り敢えず歩いてみるしかないな……）
　適当に少し歩いてみると勝手に歩が進みだす。まるで学校に吸い寄せられているかのようにスイスイと突き進むのだ。
　また、見渡して見ると小学校らしき建物が見えるし、ランドセルを背負う他の学生達も見かけられるようになった。
　その流れに上手く乗れ学校に着くことが出来そうだ。
　なんか人生やり直せるとしたら小学生からと思ったことがあった気がするけど、まさに今俺は小学校に登校しようとしているのだ。
　女の子としてだが。

取り敢えず穏便に過ごすため、可能な限りしずかちゃんの特徴を思い出す。
歩き方からもしずかちゃんらしさは維持しないといけない。
友達関係も可能な限り思い出さないと。
そうしてブツブツと独り言を言いながら歩いていると聞き覚えのある声が後ろから聞こえてくる。
「しずかちゃ～ん！おはよう！」

（む……この声は……）
この声を聞くとやはりこの場所は漫画ドラえもんの世界なのだなと実感する。
ゆったりとしてトゲがなく綺麗な声だ。
振り返るとまん丸メガネをかけた黄色い上着の少年、野比のび太がそこにいた。
漫画ドラえもんの主人公にして圧倒的なダメ男、しかし温厚で優しく、他人を深く思いやる心の持ち主だ。
この男の子の顔を見るとなぜかすごく安心する。
悩み事に対して親身に相談に乗ってくれそうだからだろうか。
「あ、あらのび太く、さん。おはよう」
「しずかちゃんがこの時間帯に登校なんて珍しいね。急がないと遅刻しちゃうよ！」
「そ、そうね。一緒に行きましょう」
のび太についていけば素性がバレることなくしずかちゃんの座席を教えてもらえるだろう。
ついでにのび太の家に居候しているドラえもんにアプローチも出来る。
「のび太さん、今日学校が終わったら遊ばない？」
「ええ？いいけど今日しずかちゃんピアノの練習日じゃなかった？」
「え？ああ、そうね！そうだったわ。じゃあ明日はどう？」
「うん、いいよ！空き地に集合かな？」
「たまにはのび太さんのお家にいきたいな」

「そ、そう。わかった」
「明日すぐ行くね」
小学生らしく実に自然な約束の仕方だった。
怪しまれることなくのび太の家に行けることになった。
早いところ記憶の問題を解消しないとこの先しずかちゃんとしてやっていけるか大分不安だ。
というか一生しずかちゃんとして生きていかなければならなかったらどうしよう。
真剣に考えてみると不都合も多い。
先ほどのび太に指摘されたピアノが弾けるようにもならないと母親がうるさいだろう。
そしてなによりしずかちゃんの人生にはのび太が付きまとってくることが確定している。
そもそも人生を奪っていることにも（少しだけ）罪悪感がある。
やはりいまやるべきことは早急にドラえもんに会うことだ。

教室についてからは自然と座席も聞け、授業にものぞむことが出来た。
小学5年の授業はまだ予習なしでもなんとかついていけそうで良かった。学校のほうは軌道に乗れそうだ。
が、重要なことを朝からずっと我慢しており、遂に限界に近づいていた。
トイレに行きたかったのだ。
（も……もう無理だ！どうせいずれはしなきゃいけないんだ！しずかちゃんすまん！）
周りの目を気にする余裕もなく急いで女子トイレの個室に入り、スカートとパンツを脱ぐと一気に放出する。
ゾクゾクっと背筋を通る感覚は、また男と違った達成感があった。

では……拭かないとな。
この行為を嫌厭してトイレに行くことを避けていたがもう仕方がない。
やらなければ不衛生だし、病気になったらしずかちゃんに申し訳がない。

一応、遠慮してティッシュを大量に取り、いざ秘部を拭く。
ティッシュなのか肌なのか分からないぐらいの柔らかさであったが、手に伝わる感触は〝何もない感〟が強く、改めて女の子になってしまった事を実感した。
トイレから出る際はなぜか外に誰もいない気配になるのを確認してから出た。
いったん一難は去ったが、今日の問題はやはりピアノだろう。
授業中に考え抜いた結論としては体調不良で乗り切る案だ。
しずかちゃんの母親はピアノでは厳しいけど基本的に優しい。情に訴えればなんとかなるはず。
学校が終わった帰宅途中の玄関の手前で暗い表情にモードチェンジし、いざ家の中に入る。
するとそこには母親がニコニコしながら出迎えているではないか。
「おかえり、静香。今日はピアノの練習に行く前にママに成果を聞かせて頂戴ね」
「………!!」
ドッドッドッドッ
心臓の鼓動が聞こえてくる気がするほど背筋に緊張が走る。俺はピアノは全く弾けない。
このまま母親にピアノを聞かせたらどうなってしまうのだろうか。
しずかちゃんが記憶喪失だとバレるか。もしかするといま人格が変わっていることさえ親ならば察してしまうかもしれない。
(落ち着け……初動が大事だ。練習通りにやればできる)
「あ、ママ?今日は何だか気分が優れなくてピアノはお休みしたいのだけど……」

おでこに手を当てつつ上目遣いで母親の様子をチラリと見ると、すごく心配そうな表情だ。
のりきれるか？
「あら……やっぱり具合が悪かったのね。いいわ。今日はもうベッドで休んでらっしゃい」
「うん。そうする……」
助かった……!!
今日はこのまま部屋に籠もって作戦を練ることにしよう。
明日、ドラえもんにどのように相談するか。本当のことを打ち明けるか。
やり方は色々あるはずだ。
ベッドで横になって考えていると、慣れないしずかちゃん生活の疲れもあって気がついたら夜を迎えていた。
晩ご飯の時も口数が少ないせいか両親から心配された。
しずかちゃんの母親に体を心配されて改めて思うが、俺はやはりずっとしずかちゃんでいるべきではないかもしれない。
この子の人生を奪ってはいけないのだ。
どうなるか分からないけれど明日ドラえもんに会ったら決着をつけよう。
今夜はもう風呂に入って寝よう……。

風呂……。風呂か。
なぜこんなにも入りたくなるのだろう。
しずかちゃんは大の風呂好きで有名だ。１日に３回は風呂に入ると書いてあった気がする。
体が欲しているのか、またはしずかちゃんの欲求が俺に混ざり始めているとでも言うのだろうか。
意を決して俺は風呂場を探す。
そして長い廊下の途中にそれらしきドアを見つけ、中に両親がいないことも確認する。
湯も張っているようだ。

（慌てるな。女の子が一人で風呂に入るだけだ）
いざ洗面所に入り大きな鏡を覗くと無表情のしずかちゃんがこちらを見ており、やましい心が見透かされているようだった。
「し、失礼します」
自分の年齢の記憶さえあやふやだが、つい小学5年生に敬語を使ってしまう。
取り敢えず髪の結びを解いてから上着を脱ぐと、白くて薄い布地のシャツに薄いピンク色をした2つの膨らみが浮かび上がっているのが分かる。
やはりシャツだけでは成長している胸の突起までは隠しきれていないようだ。
朝は敢えて意識しないようにしていたが、それを今から拝見させてもらうと考えると自然と興奮してしまう。
流れでスカートのホックを外すとストンと足元に落ち、目の前の鏡には下着だけのしずかちゃんが写し出されている。
し、刺激的だ。
変に恥じらいながら少しづつ脱いでいくから着エロ効果が出てしまっているのかもしれない。
ここはもう一気にいくしかない。
思い切ってシャツとパンツをパパッと脱いでいくと目の前には天使を彷彿とさせる透き通った白い素肌の女体があらわれる。
源静香の産まれたままの姿
漫画でもたまに出てきていたが、実際に生で間近で見ると実に神秘的な光景であり、局部の作り込みも圧倒的な完成度だ。
これはもう体験型ＶＲなんかではない。
俺はいま紛うことなきしずかちゃんそのものの体を誰にも邪魔されずに見ているのだ。
のび太が知ったら恨まれるだろうな。
風呂に入り、石鹸の泡を体に滑らせる際も張りのあるスベスベの肌にいちいち驚かされた。
ただ今日、胸や秘部を洗うことは遠慮してやめておくことにした。

全ては明日結論が出てからだ。
その後、風呂上がりに髪が全然乾かないことに苦戦しながらも、えも言えぬ達成感と初日の疲れから俺はそのまま床についた。

3. 心変わり

翌日

やはり朝起きても俺はしずかちゃんだった。
着替えるため前日と同じようにタンスを漁りだすが、心なしかスムーズに服を着替えられた。
まるでしずかちゃんの記憶が共有されているかのようだ。
朝食で両親とも顔を合わせたが、あまり長いこと喋るとボロが出るので体調が良くなったことだけ手短に報告する。
そしてサッと朝風呂に入ってからすぐに学校に向かった。
今日は余裕を持って家を出たので若干早い時間帯だ。
昨日と比べて慌てる要素もなくズンズンと進んでいると、見覚えのある後ろ姿が目に入ってくる。
(あの子は……)
出木杉くんだ。
学業優秀でスポーツ万能、かつ誠実で容姿端麗な優等生であり、しずかちゃんと仲の良い友達だ。
その分、勘もするどいはずだろう。
話が噛み合わないと人格が変わった事を悟られる可能性がある。
(まずいな)
ここは距離を置いて様子を見ることにする。のび太のように探りで不用意に近づけるような相手ではない。
しかし……漫画におけるしずかちゃんは結婚相手になぜ出木杉くんではなくのび太を選んだのだろうか。
女性が男性を選ぶ基準としては、容姿、経済力、性格あたりだろうけど、のび太は性格だけしか勝負できない。
しかし性格で戦ったとしても出木杉くんには勝てないと思う。
確かに出木杉くんは弱い人の気持ちを察するのは苦手な反面、のび

太は自身が弱い分、人の痛みが分かる。
ただ、しずかちゃんも優秀だから出木杉くんの欠点なんぞ大したマイナスポイントにはならない気がするのだ。
と、つまらぬ考え事をしていたら知らない間に出木杉くんに近寄っていってしまっていた。
「あ、しずかくん！おはよう、良い朝だね」
「あ、あら出木杉さんおはよう」
よく周りが見えている男だ。当然気づかれて会話が始まる。
漫画ではあまり出木杉くんの台詞は多くないが、なるほど話すと確かに小学生のくせに興味を引く話題を次から次と投入してくるではないか。
話をしていて飽きないし好感が持てる。しずかちゃんとしても相づちを打ったり微笑んだりするぐらいで非常に楽だ。さすが出木杉くん。
気がつけば時間を忘れ校門に到着していた。
そのまま何事もなく出木杉くんと別れ、2日目の授業に突入するも特に問題なくこなすことができ、ついに放課後のび太くんの家へ訪問する時が来る。
俺は帰り支度しているのび太に詰め寄り一緒に帰ることを提案した。
もちろんこれはのび太の家の位置が分からないからだ。
しずか邸には帰らず直接のび太家へ押し入る。母親にバレると怒られるだろうけれど、これしか方法はないのだ。
のび太は疑問に思ったようだが、難色も示さない。流石はのび太だ。誰にでも優しいというか無思慮というか、とにかくこういう時は扱いやすい。
「今日お家にドラえ……ドラちゃんはいるの？」
俺は思い切って切り出した。もはやのび太には多少ガンガン行っても大丈夫と判断している。
「ドラえもん？たぶんいると思うけどなんで？」
「実はちょっと2人に相談したいことがあるの」

「え!?しずかちゃんが?うん!分かった!」
正直、のび太には用がないので親身な反応をされると心が痛いが、今は気にする余裕はない。
家への道中、のび太は色々な話をしていたが、どれも退屈で記憶に残る内容ではなかった。
やはり現状ののび太と出木杉くんの間には雲泥の差があった。
しかし、のび太の機嫌を損ねないために、今はダルい表情をせず話を合わせなければならない。
お陰で苦痛な時間になったがついにのび太家に到着できた。
「お、お邪魔しまーす」
のび太の部屋は二階にある。
ワクワクしながら玄関をくぐり木造の古びた階段を音をたてながらのぼっていく。
そして襖をあけるとあのドラえもんがそこにいた。
ロボットだと言うのにどら焼きを美味しそうに食べているではないか。(どこから排出するのか)
見れば見るほど21世紀初頭では考えられない存在だ。
彼なら……ドラえもんならばこの状況を何とかしてくれるはず。
ドラえもんの姿を見た俺は憧れの存在に出会えた喜びと安心感で自然と目頭が熱くなっていた。
「しずかちゃん?どうしたんだい!?」
変わらぬダミ声で優しく語りかけてくるそのさまは暖かみとどこか懐かしさを感じさせてくれる。
「ドラちゃん……」
相談したいことは決まっていた。
まずは自分の記憶を呼び戻すこと。
恐らく使うひみつ道具は『わすれとんかち』になるだろう。
わすれとんかちは、忘れた記憶を叩き出すトンカチだ。
身の丈ほどもある巨大なトンカチで人の頭を叩くと、その人の目から映写機のように映像が照射される。
映像は数秒であり、対象者が忘れている記憶からランダムに抽出さ

れる。
ただし記憶そのものは蘇らなかったはず。
記憶のピースを埋めるには、映像を足掛かりにして自力で思い出さなくてはならないのだ。
俺がここまで道具のことを詳しく知っているのが自分でも意味不明であるが記憶喪失といったらこれしかない。
早いところ俺がしずかちゃんなのか他人の人格なのか。まずはそこをハッキリさせたかった。

しかし

記憶喪失を打ち明けようとする直前。
ふと頭の中に疑問がよぎる。

俺がしずかちゃんではなく他人の人格であった場合、どのような対処をすることになるのだろうか。
ひみつ道具の中には『タマシイン・マシン』という物があり、一時的にタマシイだけ抜け出して指定した過去の体に乗り移れる道具があった。
あれは自分の体への憑依であったが、今回は俺のタマシイ(人格?)がしずかちゃんに憑依してしまっている。
道具の使用期間が切れたタイミングで俺のタマシイは元の体に正常に戻れるのだろうか。
実は俺の人格やらタマシイが抜き出た元の体が既になくなっていたとしたら……。
ドラえもんやのび太の立場から見ると未来の結婚相手であるしずかちゃんが乗っ取られているとも取れるこの状況。
なんとかしてしずかちゃんから俺の人格を外に出したいと思うはずだが、出された俺の人格、タマシイの戻り先となる器がないことなど関心はないはず。
だとすると、引っ越し先のなくなった俺の人格はそのまま消滅して

しまうのではないか。
「……」
黙り込む俺（のび太）に静香ちゃん（しずかちゃん）が心配して声をかける。
「どうしたの？ 大丈夫？」
「え、ええ……」
消滅したくない。死にたくない。
死への恐怖が俺を自然と動かしていく。
「ママのピアノの練習が厳しくて……少しだけ休みたいからママに催眠術をかけてピアノの練習をやったことにしたいの」
助かりたい思いから咄嗟に言葉が出てきてしまった。
暫くしずかちゃんの人生を……借りることに決めたのだ。
罪悪感はあった。
小学5年生という楽しい時期を奪うのだから。
いつか状況を把握出来たら早めに体から出ていく。
このときは素直にそう思っていた。
「そうなのかぁ。それは大変だね。じゃあこれがいいかな……『さいみんグラス』～！」
ドラえもんがお腹の四次元ポケットをゴソゴソと漁っていつもの掛け声と共に取り出したのは怪しげな柄のメガネであった。
「これをかけて人になにかを言い聞かせると、相手はその言葉を額面どおりに信じ込むんだ」
ドラえもんが道具の説明をしている間に俺は心の中で笑ってしまった。
その場で思いついただけの言い訳で最初に借りてみたいと思っていた道具を出してくれようとは。
道具の中には使い勝手が悪い物から世界に影響を及ぼす危険な物まで幅広くある。
その中に無敵最強系の道具もいくつか存在するが俺は最初からそれらを借りることはしない。例えば、『もしもボックス』だ。
もしもボックスは、「もしも○○な世界だったら」を体験できる電話ボックスだ。

これの中へ入って受話器に希望する条件を告げると、ベルが鳴り響き、そのとおりの世界に連れて行ってくれる。
仮にしずかちゃんが世界一の大富豪である世界も実現できる。
ただ、世界の理（ことわり）に影響を及ぼす道具は悪い使い方をすると危険だし、何より歴史改変にも繋がってしまう恐れがある。
このような道具は未来の時空警察タイムパトロールが監視しているかもしれない。ＧＰＳなりアクセス履歴なり何かしらの監視ツールが仕込まれている可能性があるのだ。
そんな代物をドラえもんから借りて使いまくったらすぐに足がついてしまうだろう。またもしもボックスはデカくて持ち運びにくい。
それよりもマークされていなさそうな道具に絞って長く恩恵を得るほうが安全で得策と判断していた。
その点で『さいみんグラス』は丁度よかったのだ。メガネを通して喋りかけた相手という限定的な範囲ではあるが効果は１００％。
これをドラえもんに対して行えば実質その気になればあらゆる道具をいつでも借りられるということだ。
ミスった場合を考えてここですぐにドラえもんとのび太に対して使わない。まずは静香の母親で使い方をマスターした上で次のステップに進むほうが安全だ。
「ありがとうドラちゃん。早速試してみるわ」
俺は表情がニヤけないようにしつつ震えながら受け取ると、すぐに野比家を後にした。
遊ぶと思っていたのび太はポカーンとしながら後ろ姿を見送っていた。
(のび太すまん……。しずかちゃんに慣れていない今遊ぶとボロが出る可能性があるのだ。今回は利用させてもらったがいずれこの借りはきちんと返すからな)
それよりも『さいみんグラス』が使いこなせるかどうかは最重要タスクなのだ。俺は早速家に帰って母親に試すことにした。
丁度居間に母親がいたので話しかけてみる。
「あ、ママ。ただいま。今日は学校終わったらそのままのび太さんの

家に行ったの」
「静香、一度家に帰らないとダメと言ったじゃない！ピアノだって練習日じゃなくても毎日弾いておかないとだめでしょう?あら、その変なメガネどうしたの?」
「ママがそのままのび太さんの家に行っていいって言ったんじゃない。それにピアノもさっき弾いたわよ」
メガネを通して母親にウソを吹き込む。
心が痛むがこれは実験だ。ここが我が人生最初の一歩にして革命的な一歩となる。
催眠のかけかたも成功と失敗の境界など念入りに調べておく必要があるのだ。
ピアノなんて帰ってきたばっかりで時間的に無理な事が分かっているのに「さっき弾いた」という言葉が通るのかどうか。
どこまで強引に催眠出来るのか把握しておきたかったのだ。
「……確かにのび太くんの家にそのまま行っていいって私が言ったわね。ピアノもさっき弾いていたのに私どうしたのかしら」
母親は考え込むように部屋に戻って行ってしまった。
(想定通り……!やはり『さいみんグラス』は実用的な道具だ。持ち運びしやすい上に効果は絶大だ)
これさえあればドラえもんでさえ催眠をかけて思いのままにできるだろう。
俺はこれからの詳細の段取りをお風呂に入りながら考えることにした。
家につくと真っ先に風呂場へ向かう。
そして鼻歌を口ずさみながら衣服を一枚一枚脱いでいく。
風呂場の鏡に映り込む美少女の裸体。
成長すれば絶世の美女になることは証明されている。容姿も完璧だ。
考えてみれば全てを手に入れたといっても過言ではないのではないか。
目の前のしずかちゃんは不敵な笑みを浮かべていた。

4．道具の検証

せっかくこの世界に来たんだ。この際、大抵のことはドラえもんの道具に頼ることにする。

なぜか分からないが俺はひみつ道具について大分覚えていることが分かったからだ。今後、どんな道具を借りていくべきかリストアップした上で慎重に選んでいく。

そのためまずは道具のランク付けをして分類分けしてみることにした。

トップクラスの『もしもボックス』はやはり無敵最強なのでS級になるだろう。他にも最強系の道具はある。それは『ソノウソホント』だ。

これはクチバシの形をしており、口に装着して嘘をつくと、その嘘が本当（現実）になる道具だ。直接的に影響範囲が広い効果を引き出せるため実用性は『もしもボックス』と並ぶ。コンパクトな分、それ以上かもしれない。当然、タイムパトロールから危険視もされている気がする。

念の為、この手の道具は全てS級として一旦様子見とする。

俺が狙うのは影響範囲もほどほどで目をつけられにくい道具で間接的に恩恵が得られる物だ。持ち運びしやすいとなお良い。

その点で『さいみんグラス』は実に丁度よかった。メガネを通して話した人に強度な催眠をかけてくれるのでその場凌ぎがしやすい。ただ、機械であることにはかわりないからGPSがついている可能性は捨てきれない。まぁ乱用して社会のバランスさえ崩さなければ大丈夫だろう。このような立ち位置となる道具をS級につぐA　級クラスとして狙い所とする。そして有用だけど消耗品として消失してしまうものや、子供向けで効果の価値が低い道具をB級、C級とした。

ではまず何から手を付けるかと言うと、人格が変わっていることがバレないようにするため最初はしずかちゃんの生活に順応することに注力する。例えばピアノだ。しずかちゃんとしてピアノ（とたしかバイオリン）は弾けるようにしておきたい。

ただ、俺は楽器が得意でなかった。
そこでピアノの習得に使う道具を思い起こすが、特訓や訓練系の道具はろくな物がない。のび太が水泳や野球のために『スパルタコーチ』シリーズを使ったことがあるが、スパルタすぎて死にかけていたし、効率的でもなかった。
かと言って『能力ディスク』で一時的に達人の能力を体にセットするのも空しいだけだ。
あくまで自分の力でピアノを弾けないと意味がない。
(能力習得は長期戦になりそうだな……)
時間がかかるが複数の道具を併用すれば手がないわけではない。しばらくは『さいみんグラス』で時間稼ぎをしながら道具で効率的に習得していくことにする。
となれば次は学力だ。しずかちゃんの成績は当然上位だろう。俺の知識でも小学5年生レベルであれば並の点数はすぐに取れると思うけどそれだけじゃ学力が下がったと思われてしまう。なるべく注目を集めないためにも成績は維持しておいたほうがいい。
しかし勉強なんてすごく久しぶりの感覚だし、出来れば可能な限り楽して良い成績を取りたい。それにはやはりひみつ道具の1つ『アンキパン』が適しているだろう。
これを本のページなどに押し当てると、合わさった部分が転写され、食べれば転写した内容を即座に覚えられる。
ただし、この道具は使い勝手が難しい。
食べられる限り何枚でも効果が重複するが、その内容を暗記していられるのは食べたアンキパンが体内にあるうちだけで、排泄した途端に忘れてしまうのだ。
食べたものは24~72時間で排泄されることを考えると確実にいくならテスト前日に使う程度だ。さらに保存も通常のパンだと2日ぐらい。ドラえもんに発注して受け取ってからすぐに冷凍しておくとしておよそ保存期間は一ヶ月と考えておこう。かなり不味くなりそうだけど。
これでしずかちゃんらしい生活の基礎は整う。

このまま当分はしずかちゃんとなり様子を見ていき、ゆっくり記憶を取り戻す。戻った記憶次第で後のことは考えることにしよう。
ちなみに『わすれとんかち』は怖いので使わないことにした。

（よし……では実験の続きだ）
　俺は再度、しずかちゃんの母親の元に行く。
「ママ、私って今日のピアノの練習もう終わった？」
「何言ってるのよ。さっき終わったじゃない」
「そうね。ありがとう」
「おかしな子ねぇ」
……よし。
　俺はさいみんグラスの効果の持続性を確認した。
　永続的なのか一時的なのか仕様次第では大分使い方が変わってくる。少なくとも数分たっても効果は継続されていることが分かった。この後、２４時間後にも確認する。ただ、仮に永続的であるとしてもドラえもんを相手にした場合はもう少し慎重にいきたい。
　ドラえもんはさいみんグラスの形状を知っているから道具を出した途端にバレてしまう。度々しずかちゃんがこのメガネを使っているところを目撃され、不自然なことが続いた場合真っ先に疑われてしまうだろう。
　ではどうすればいいか。
　答えはシンプル。道具でドラえもんの記憶を消してしまえばいいんだ。
　記憶を消す道具はいくつかある。一番効果が強いのはやはり『メモリーディスク』だ。記憶を吸い取ったり、読み取ったり、偽物の記憶を埋め込むこともできる。これを使って記憶を消去することが出来るはずだ。当然この道具は自分的にはＳ級に分類されるから預かることはしない。
『さいみんグラス』で道具を借り、その記憶を『メモリーディスク』で消す。借りた道具はなるべくその場で使いすぐにドラえもんに返してすぐに記憶を消せばリスクを負わずに実質使い放題に出来るのだ。

『さいみんグラス』を手に入れた時点で既に何でも出来る万能感さえ持ち始めていた。
（試してみたい）
俺は街のマップを覚えるついでに、さいみんグラス片手に家を飛び出した。
余裕が出てきた今になって分かるが、街中を行き交う人々は普通に仕事をしていたり子供は遊んでいたりそれぞれ生活をしている。ドラえもんの世界がリアルタイムで動いているのだ。
漫画にあるようなその他大勢という感覚がまったく感じられない。
完全にこの世界は1つの現実として存在しているようだ。
そのへんに立っている地図を見てもここが練馬区の街であることも分かった。
（練馬区か……。実在する区だな。空き地や裏山もあるのかな？）
俺は地図からそれらしい空白の空き地を見つけて向かった。
するとそこにはお馴染みジャイアンやスネ夫が野球をしていた。
（おおお！いるいる。やっぱり皆いる）
漫画にある土管のようなコンクリートが３つ積まれた物もあるではないか。
（ジャイアンのことをしずかちゃんは何て呼んでたっけ……。あ！そうだ！）
「たけしさーん」
振り返りしずかちゃんに気づいたジャイアンは速攻で走ってくる。スネ夫達も野球を中断して駆け寄ってきた。
「しずかちゃん、どうしたんだ？」
太い声でぶっきら棒に喋るジャイアンに感動しつつも俺は『さいみんグラス』を試したい衝動にかられていた。
ジャイアンとスネ夫は映画だとのび太の味方だが通常の漫画やアニメだとのび太をイジメる側だ。ちょっとぐらい痛い目にあわせても問題ないだろう。
さいみんグラスをかけた俺はジャイアンの目を見て喋りだす。
「この間貸した５００円まだ返して貰ってないけど……。スネ夫さん

もよ。いつ返してくれるの？」

「えー！ごめんごめん！いまサイフあるから返すよ」

　そう言うとスネ夫はゴソゴソとポケットから５００円を取り出し渡してきた。ジャイアンは手持ちがなかったらしくまた今度にした。

　道具を使って２人からお金を巻き上げることに成功したが、実験とはいえ割と虚しさを感じる。

（小学生から大金をせしめるわけにもいかないしな。さいみんグラスも効果範囲的に大分地味な道具だし……）

　だからといってさいみんグラスからのコンボで全てが成立するから必須なアイテムであることには変わりはない。

　明日以降これを使ってドラえもんから他の道具を借りる。未成年ではあるがお金稼ぎも工夫していくつかの道具を借りれば可能になるはずだ。

　いや、そもそもドラえもんの道具自体に魅力があるのにお金稼ぎとかしょーもないことに使おうとするから地味な道具選定になるのではないか？もう少し夢のあることに使ってみるか……？

「し、しずかくん……怖い顔してどうしたの？」

「で、出木杉さん！」

　急に話かけてきた声の主は出木杉くんであった。仲が良いから敢えて避けていたのにアッサリ出会ってしまった。

「昨日は早く帰っちゃったようだし……何かあった？」

　この言葉にギクリとする。そうだった。

　出木杉くんとしずかちゃんはよく一緒に帰っている。やはりこの男……危険だ。

「ぐ、具合が悪かったの」

「そう、大丈夫？熱はない？」

　そう言うと出木杉くんは俺（しずかちゃん）の額に手をあててくるではないか。

　しかもこの表情は計算ではない。真剣にしずかちゃんの心配をしているのだ。

（かっこいい……）

これは男でも惚れてしまうレベルだ。

しかし、舐めるな。俺はこの世界のヒロインだぞ。この美少女を落とそうなど100年早いわ。主導権を持つのはこの俺だ。

しずかちゃんの体を手に入れたせいか、出木杉くんに対する嫉妬もあいまって俺は強気に対抗し始める。

「そうかしら……」

俺(しずかちゃん)は額にある出木杉くんの手にかぶせるように自分の手を置いた。

「どう? 熱い?」

「うーん、高くはなさそうだけどね」

手を重ねられた出木杉くんは至って平静を保ったままだ。

小学校時代なんて女の子の免疫耐性はまだついてないはずだ。しかもカワイイ子に手なんて握られたら普通は好きになっちゃうだろ。猛者(ツワモノ)だ……。

ならば……これはどうだ。

「でもちょっと暑いのよねぇ」

そう言って俺(しずかちゃん)は前かがみになりながら胸元のシャツをパタパタと扇ぐ。

出木杉くんの目線が一瞬、胸元へ行ってから離れるのが分かった。

(ふ……見えただろ? 谷間が。しかしおそろしく速い目の動き。俺でなきゃ見逃しちゃうね)

恐らく瞬間的に脳裏に焼き付け、後から映像処理を行うのだろう。凄まじい情報処理能力だ。

しかし、やはりなんだかんだ出木杉くんも男の子だ。異性にはやはり興味を持ち出していると見える。もしかすると漫画では見れない性癖も抱えているかもしれない。

長期戦になりそうだが思わぬところで新たな楽しみが増えた。しずかちゃんを使って端正な澄まし顔の出木杉くんを落としてみるのも余興として悪くない。しかもそれはドラえもんの道具は使わずにだ。

この時、俺と出木杉くんの因縁の戦いが始まったような気がしてい

た。

5．小金稼ぎと初経験

しずかちゃんになってから数日が過ぎていた。
記憶喪失というか人格が変わったことも今のところ周りにはバレずに過ごせている。少しでも怪しまれた時は『さいみんグラス』を使っている。
相変わらず記憶は戻らないが、この生活が軌道に乗ってきたこともあり不自由は感じていない。ただ、小学生だけあって自由に使えるお金は少なかった。ジャイアンやスネ夫から巻き上げたとしてもたかが知れているし、ここらで纏まった資金を手に入れておきたいところだ。
しかし未成年だと自由に稼げないし、急激に資金が増えても怪しまれるだろう。
直接のお金集めでドラえもんの道具を使うならやはり『フエール銀行』一択となる。
フエール銀行は、１時間ごとに利息がつく、未来の銀行の携帯型ＡＴＭだ。１時間あたりの金利は、普通預金なら１０％、１か月定期預金なら２０％、１年定期預金なら５０％で、融資だと２０％。
各種手続きは窓口の前にお金を置くだけであり、個人の特定と手続きは全て音声で出来る。
お金を預けておくだけでとんでもない利子で増えていくという最強のアイテムであり間違いなくＳ級なのだが、この道具の使用は抵抗があった。
直接、道具をお金稼ぎに使うと罪に問われる、と言う漫画でのドラえもんの言葉を思い出したのと、そもそもフエール銀行は未来の銀行だ。今の時代から預金したアクセスログ自体を残すことが怖い。そしてこんな危険な道具をタイムパトロールが監視していない可能性は低い。
よってこの道具もやはり念のためパスする。
お金を稼ぐならあくまで間接的にしておきたい。しかもなるべく身の丈にあった金額感で。

やり方はいくつかありそうだが、道具の併用が必要そうだ。
俺は早速、のび太との約束をとりつけドラえもんに合うことにした。いちいちのび太を介して会いに行くのは面倒なのでいずれはドラえもんがこちらに来てくれるよう調整しておきたいところだ。
「のび太さん、ドラちゃん。この間はありがとう。ピアノの練習が厳しくて助かったわ」
「よかったね。落ち着くまで借りてていいよ」
「ありがとう。あ、そうだ。使い方がちょっと良く分からなくてのび太さんで試してもいい?」
「うん!いいよ!」
のび太はあっけらかんと応える。
「じゃあいくわよ」
俺は怪しまれることなくさいみんグラスを通してのび太を見据える。
「あなたは段々眠くなる……。ちょっと1時間ばかり寝ることにしました」
言葉を言い切る手前で既にのび太は座りながら寝ていた。
(上手く寝てくれた。さいみんグラスは2人いると相手にしにくいからドラえもんだけにしないとな)
「わー!寝たわ!すごい!」
「しずかちゃん、のび太くんはさいみんグラス使わなくても寝る子だよ」
確かにそうだった。
「さて、ドラちゃん。あなたは『ラッキーガン』と『かならず当たる手相セット』を持っていたら私に貸したくなる……」
先制攻撃だ。これは賭けでもあった。さいみんグラスがロボットであるドラえもんに有効か不明だったからだ。
失敗を考慮して最初はつまらない内容で催眠を試しても良かったが、根拠のない自信もあった。仮にドラえもんに催眠が効かなかったとしても何とかやり込めるだろうし、何よりしずかちゃんになってから調子に乗ってスリルを求めていたこともあるのかもしれない。

直球で際どい要求を伝えたが果たしてドラえもんは……？

「うん、あるよ～」

実にあっけらかんとしてポケットから2つの道具を取り出してくれた。

「そ、その道具を私に貸してね」

「うん、分かった」

若干、反応っぷりが催眠による効果なのか分かりにくかったが、疑いも持たずに平然として道具を貸すドラえもんを見て確信できた。

あとは『メモリーディスク』でドラえもんの記憶を消して完了だ。

ただ一点だけ懸念がある。メモリーディスクは頭の上に置いて使用するため、記憶を消去した後にポケットにしまうまでの記憶はどうしても残ってしまうのだ。

毎回、メモリーディスクをポケットにしまう際、目の前に俺（しずかちゃん）がいたらさすがに怪しまれてしまうだろう。

俺がのび太家を離れた後に『メモリーディスク』でしずかちゃんと会っていた記憶ごと消すよう『さいみんグラス』で催眠をかける。

それがベストだ。

「じゃあ私がこの部屋を出たらドラちゃんは『メモリーディスク』を使って一時間前までの記憶を消してね。あ、のび太さんの記憶もね」

「はーい」

自分の記憶を消す事なのに従順に聞いてくれた。一時間前の記憶消しはちょっとやりすぎたかもしれないが初回だし念のためだ。

そのまま俺（しずかちゃん）はのび太家を後にした。

そして土曜日、学校が休みの日を迎える。

この日、友達と一日中遊ぶと親に言い残して俺は競馬場へ向かった。自由に使える資金を手に入れたいためだ。

しかし競馬場には未成年者は単独で入場出来ないので、その辺のお父さん候補を探す。

「あのぉ……今日1日私のお父さんになってください」

一人歩いている裕福そうな小太りの中年を見つけて、『さいみんグラス』を通して語りかける。しずかちゃんの可愛さなら道具を使わず

とも丸め込めるかもしれないが別の意味にとられてしまうとやばいので、道具で確実に本当のお父さんになってもらう。
「も、もちろん。いいとも」
　催眠効果もあって即答だ。
　この人も美少女の父親に1日なれるなんて幸運なことだろう。
　ちなみにここに来るまでに既に1つ道具の効果を発動している。
　それは『かならず当たる手相セット』だ。手相を自分が望む内容で書き込める代物であり当然、金運の相を自分にセットしている。
　ただこれだけで競馬場にのぞんでも大した収入は見込めない。
　そこで『ラッキーガン』の登場となる。
　ラッキーガンは、人の運を操るリボルバー（回転式拳銃）だ。２色の弾があって、赤色の弾が当たった人は幸運に恵まれ、黒色の弾が当たった人は不運に見舞われる。
　装弾数は４発。赤色の弾が３発、黒色の弾が１発。初めにこれらの弾をすべて装填しロシアンルーレットのように撃つ。
　これをお父さんにむけて撃つ。
　赤が出る確率は７５％なのでまぁ大丈夫だろう。仮に黒が出ても不幸はお父さんに向かう。
　ピンポーン♪
　赤が出た。
　この状態でお父さんに万馬券を購入してもらう。
「お父さん、当たったらお金分けてね♡」
　これで仕込みはＯＫ。金運が上昇しているしずかちゃんのフラグをたてることで『かならず当たる手相セット』とのコンボが発動するだろう。

　数時間後

　２０万円ほど稼いでホクホク顔で帰宅。
　金額はもうちょっと稼ぎたい気もしたが多すぎない適度な量だ。
　なお、１日お父さんにはバイト代として２万円を握らせたし不平はな

いでしょう。さいみんグラスでジャイアン達のように直接お金を巻き上げても良かったが、こちらのやり方のほうが後ろめたさもない。ただこのやり方はもう2度とやらないほうが良い気がする。『ラッキーガン』を使っていたらいつか２５％の確率で黒が出る。
不運のイベントは人それぞれだろうけど、のび太は車や自転車に轢かれてドブに落ちていた。
いくら他人のオジサマがくらうとしても、２０万円に相当する不運としてはリスクがデカい。打ちどころによっては死ぬかもしれないし、さすがに死なれてしまうと罪悪感が出る。
来週はテストもあるし一旦、道具の利用はこのぐらいにしておいて、大人しくしずかちゃんとして暮らすことにするか。
美少女だと買い物するにしてもオマケされたり、もてはやされたりと平凡な日常でさえ楽しいのだ。また日に3回という日課になってきているお風呂タイムもちょうど楽しみの1つになってきている。未だ他人の体という感覚を拭いきれず触ることも躊躇っていたが、気づいてしまったのだ。清潔を保つためにやむを得ずシャワーをあの場所にあてた瞬間、実感したことのない得も言えぬ快感が体中を駆け巡ることを。
このまま当て続けるとどうなってしまうのか。
(試してみたい……!)
恐らく女として体験するエクスタシーが初の体験なのだろう。
未開の領域に入ってしまいそうな気持ちになるため控えていたが、どこかもどかしい気持ちの日々が続いていた。今日こそこのムラムラを何とかしたい。
他人の体を、しかもあのしずかちゃんの体を触るという罪悪感に対して、ただ体が欲しているだけだと自分に言い聞かせながら風呂の栓を回す。そして湯が湧くまで宿題を済ませてしまおうと思ったが気持ちが高揚して全く手が付かない。
今頃のび太さんは何をしているのだろう……。
……ん？

（なぜ今のび太が出てきた？）

しかも俺は〝さん〟付けで呼ぶことはない。

まぁ、いい。今は他のことなどどうでもいいのだ。

風呂が湧き上がるお知らせ音が聞こえ、俺は希望に満ちた表情で浴室へ吸い込まれていった。

（自主規制のためこのシーンカット）

部屋に戻ったしずかちゃんは余韻に浸り惚けていた。

乾ききっていない髪は乱れ、顔はまだ紅潮し火照っている。

想像以上にすごかった。女の快感は男とは違い、周りが見えなくなるほど頭が真っ白になった。時折、押し殺していた甘い吐息が、可愛らしくも卑猥な喘ぎ声となって浴槽に響き渡った。鏡に写るしずかちゃんがそれに合わせてよがる姿も興奮を引き立たせていた。

ただ、絶頂と同時に虚しさも感じた。初めて女の快楽を知りつつも一人で何をしているんだという気持ち。自分の体だがしずかちゃんという他者の体をイジってしまった罪悪感が後から押し寄せた。

誰も知らぬ夕暮れ時、俺（しずかちゃん）は一人複雑な気持ちになっていた。

真相編

6．未来の異変

数日経つと結局道具を使わない平凡な日常にも飽きが来る。せっかくこの世界に来たからには色々な人と会ってみたい。特にジャイアンの妹ジャイ子はまだ見ておらず無性に会いたくなっていた。自分が無意識にジャイ子と百合を目指しているとは考えにくいがとにかく彼女を一目でも見たいのだ。

剛田家の八百屋の場所はもう知っていたので訪ねてみたが、どうやらジャイ子は公園にデッサンしに行っているとのこと。そうだ、たしかあの子は将来、漫画家志望だった。

(今日は特にやることもないしこのまま公園に行ってみよう)

追いかけるように公園に行くとそこにジャイ子はいた。スケッチブックを持って好奇心に満ち溢れた顔でウロウロしているが、そのさまは愛くるしくどこか懐かしさすら感じる。

しかし……どうも様子が変だ。

周りに男の子が３人ほど囲うようについてきており何かを言っている。そしてしまいにはジャイ子からスケッチブックらしき物を奪い取ったのだ。男の子達の表情も一緒に遊んでいるというより侮蔑を込めた嘲笑だ。

大方、書いている絵をバカにしているのだろう。一方のジャイ子は取り返そうとして半泣きになりつつある。

これを見た俺はなぜだか分からないが全身の毛が逆立つほどの怒りが込み上げてくるのが分かった。

「お前ら……！」

言いかけて自分がしずかちゃんであることを思い出す。年下の男の子達を追い散らすことはしずかちゃんの身でも簡単だが、この体で乱暴なことはしたくない。そしてやるならば道具を使って徹底的に懲らしめたくなってきた。

しずかちゃんになってからここまでは主に金と教養力を揃えてきた。
ピアノやバイオリン等のお稽古は既に『集中力増強シャボンヘルメット』と『三倍時計ペタンコ』を使って集中力と時間を増やすことで習得していたので、最後に欲しいのはやはり力であった。
半グレ、暴力団、煽り運転にモンスターペアレント。一般の人様に理不尽に迷惑かけている奴ならば何でもいい。一度、そんな奴らを圧倒的な力をもって成敗してスッキリしてみたかった。
「こらぁー！おめぇら俺の妹をイジメっと許さねーぞー！」
気づくとジャイアンがすごい形相でいじめっ子達を追い散らしている。さすが妹想いのジャイアンだ。こっそりついてきていたのだろうか。
ここはそのまま彼に任せておいて大丈夫そうだから、俺はドラえもんから借りる戦闘系の道具を頭の中で考え始めた。
『イナズマソックス』履くと目にもとまらぬ動きが出来る。
『スーパー手袋』はめると力が強くなる。効果は手だけではなく、全身に及ぶ。
『ウルトラリング』指の力が何千倍になる。
『ガンジョウ』体が鉄のように硬くなる。
『コンチュー丹』虫の能力を使える。
『空気ピストル』指先から空気の衝撃波を出せる。
『スーパーダンごっこふろしき』低空ながら飛ぶことができ、空気銃の弾もはね返し、ものを透かして見ることもできる。
種類は割とあるが正直なところ、目立たず簡単に悪い奴を倒してスッキリしたい。
そう考えると人外の動きはNGなので空は飛ばないほうがいいし、弾も出さないほうが良さそうだ。『コンチュー丹』なんて某テラ〇ォーマーズと被るしそこまでの特殊性は求めていない。
また、悪の相手も政治家レベルの大物に手を出すと、下手すると身元がバレた上に国家権力とも戦わないといけなくなるかもしれない。何とかして勝ったとしても、未来が変わることは避けられない。そう

なると抹殺しても世間に影響がなさそうな小物を選ぶ必要があった。
（スーパー手袋だけでいっか……）
　取り敢えず無難に全身を強化できる手袋だけにしておく。
　もうすぐドラえもんが定期訪問に来る時間だ。その際に頼むことにする。
　ガチャリ
　案の定、目の前にピンクのドアが突然出現し、ドラえもんが出てきた。
「やぁしずかちゃん。言われてた『畑のレストラン（焼き芋）』を持ってきたよ。今日は他に困っていることはないかい？」
　この定期訪問はドラえもんに催眠をかけることで実現している。
毎回、しずかちゃんのほうからのび太の家に行っていては面倒な上に不自然だし、メモリーディスクを使った後の後片付け問題があった。
　そのため、定期的にしずかちゃんの家に来て貰いそのタイミングで必要な道具があれば借りる方式をとっていた。『どこでもドア』で帰ってもらってから『メモリーディスク』で記憶を消去してくれればメモリーディスクが頭の上に残っていたとしても直接しずかちゃんに結びつく情報はない。
「あら、ドラちゃん。いつものご訪問ありがとう。実はお願いが……」
　言いかけてから、ふと考える。
　ここまでしずかちゃんとして道具を借りまくっていて日が経過している。
（ここらで一度未来の様子を探っておいたほうがいいかもしれない）
　最近はドラえもんから借りた道具を乱用しないようにはしていたが、使用履歴などとっていないか、実は料金がかかっていないか。
　ドラえもんに未来と通信させて動きがないか確認しておきたかった。
「ドラちゃんは最近未来にいるドラミちゃんとお話したりしないの？」
「ドラミ？ そうだねぇ、あいつも忙しいみたいで最近は話せてないなぁ」

「私、久しぶりにドラミちゃんとお話したいわ」
「んーそう？じゃあ、久しぶりに『タイム電話』で通信してみようか」
「わーありがとう！」
ドラえもんは早速、『タイム電話』を取り出してドラミにかけはじける。
プルルル。プルルル。
「………」
「繋がらないの？」
「うん、そうみたいだ」
発信音だけが空しく鳴り続けるがドラミは電話に出ない。
たったそれだけの事で自分の行動がバレて大騒ぎになっているのではないかと不安になる。
「なんか心配ね。『タイムテレビ』とかでドラミちゃんの様子を見たいわ」
絶対に大丈夫だとは思うが念の為にドラミの状況を確認しておきたい。
「んー、忙しいだけだと思うけどしずかちゃんがそう言うならのび太くんの家に戻ろう」
タイムテレビは大きいためのび太部屋の押入れの中にしまってあるのだ。
早速どこでもドアを介してのび太の家へ向かう。
部屋ではのび太が座布団を枕にして昼寝をしていた。口からはヨダレが垂れており実にだらしのない表情だ。しずかちゃんは将来この男に嫁ぐことになるが、恐らく俺の人格のままであればそんなことは絶対にあり得ない。しかしのび太は結ばれる未来を確信した上でストーカーの如くアプローチしてくるのは必至だ。
それを退けるのは並大抵のことではないと思うと憂鬱になった。
タイムテレビのセッティングが終わりドラえもんは何気なくドラミを呼び出し始める。

ザザザザ、ザー……
しかし画面にはノイズのような音と共に砂嵐が表示される。
「おかしいなぁ、押し入れに入れている間に壊れちゃったかな？」
バンバンとテレビの横を叩いていると静止画像が表示された。
しかし、写し出されるその内容に二人は言葉を発することを忘れるほど固まってしまう。
未来の建物らしき物体は写し出されてさえいるが、どれもが半壊しており、空はどんよりした赤い雲で覆われていたのだ。
「なに……これ？」
俺(しずかちゃん)は思わずドラえもんに問いかける。誤って紛争地域を写し出してしまったのではないかと思えたからだ。
しかし、ドラえもんの表情はモニターを凝視したまま動かない。
「ここは……ドラミがいつも通っているセンターだ」
ドラえもんは半壊した未来の建物を指して、声を絞り出すように応えた。
「え!?破壊されているわよ!?」
「……」
またドラえもんは黙り込んでしまう。
しずかちゃんの声でのび太が昼寝から覚めたようで、目が数字の3のような寝ぼけ眼で問いかけてくる。
「……あれぇ？しずかちゃん。いつの間に来てたの？」
「あ……のび太さん。何か……未来の様子が変なのよ！」
「ええ～……？」
プルルル。プルルル。
すると突然鳴り響く『タイム電話』の音に3人はビクリとなる。
そしてドラえもんは恐る恐る電話をとった。
「もしもし……？」
「おにぃ……ん！聞こえる!?ドラミよ！」
「聞こえてるよ！そっちはどうなっているんだい!?」
「電話にでれなくてごめんなさい！どうやら重大な歴史改変があったようなの！未来はいま大変なことになっているわ！」

ドラミが喋る後ろからは発砲音やら爆撃音のような音も聞こえてくる。
「一体どういうことなんだい！ 建物が破壊されているようだけどドラミは無事なのか!?」
「私はいま子供たちを避難させている最中なの！ 落ち着いたら後で詳細を話すけど、とにかく今は出木杉さんのことを注意して見ていて欲しいの！」
未来でとんでもないことが起きていることが分かるが、出木杉くんを見る必要があるのが不明だ。それをドラえもんが代弁するように問いただす。
「なんで出木杉くんを見る必要があるんだい!?」
一瞬の間の後、ドラミの口からは驚愕の内容が告げられる。
「……未来では今ロボット戦争が起きているの！ 発端は出木杉コーポレーションのロボットよ!!」
その言葉を最後に『タイム電話』は回線不安定で切れてしまった。
（で……出木杉くんが戦争を起こした……？）
ドラえもんやのび太もドラミの話に呆然としている。
いや……。しかし聞こえたのは出木杉コーポレーションのロボットだと言うこと。出木杉くんがやったとは言い切れない。関連しているのは確かだろうけど。
しかしなぜ彼が？
これが皆が抱いている疑問だろう。
あんなに誠実で好青年である出木杉くんが戦争
勃発に関わることなどあり得るのか？
漫画では将来仕事で火星に出張するようなエリートになっていた気がする。
（まさか……）
歴史改変に繋がる要素があるとしたら……
自分しかいない。しずかちゃんの人格が変わったというあり得ない出来事が歴史の変化に大きく関わっているのかもしれない。最近、自分が出木杉くんに興味を持ったことも関連がありそうだ。

しずかちゃんの美貌をいかして出木杉くんをたぶらかしたことにより、出木杉くんが戦争を引き起こすような人間になってしまったとしたら原因は完全に自分だ。
　全身から血の気が引いていくのを感じる。

　その様子を心配そうに見つめる男がいた。
　のび太だ。
　しずかちゃんに好意を持たれている出木杉くんに対する嫉妬と単純にしずかちゃんへの思いやりが入り混じった複雑な感情ではあるが、青ざめているしずかちゃんに対してのび太は優しく声をかける。
「だ、大丈夫だよ！　未来が大変なことになっているのなら現在の僕たちがまた戻してあげればいいんだ！　出木杉くんが原因だと分かっているなら彼にそうならないように助けてあげればいい！」
　普段はだらしがないのに周りが落ち込んでいると急に男前になって皆を勇気づけたり励ましてくれたりする男、のび太。
　俺（しずかちゃん）はそんな凛々しいのび太の表情を見て胸がドキドキしていることに気がついた。
（のび太のくせに生意気な奴……。でもこの男の言う通り原因にアタリはついている）
　いま俺がやるべきこと。まずは目を背けていた記憶喪失に手をつける必要がある。俺がしずかちゃんの中に居続ける事を避けるためには、どのような理由でどのようにしてしずかちゃんになってしまったのか記憶から探っていかなければならない。
　記憶が蘇ることで自分の真実を知ることに耐えられるのか不安があったが未来が悲惨なことになっている今、何もしないわけにはいかないのだ。
「ドラちゃん。『わすれとんかち』を出してくれる？」
　俺（しずかちゃん）は静かに切り出した。

7．疑惑

『わすれとんかち』

自分の記憶のおさらいになるが、これは忘れた記憶を叩き出すトンカチだ。

「それで私を叩いてちょうだい」

俺（しずかちゃん）は真剣な表情でドラえもんに迫る。

「ええ？なんでしずかちゃんを？何か記憶をなくしてしまっているのかい？」

「……分からない。でも出木杉さんの事で何か忘れている手がかりがあるような気がするの」

もちろん嘘だがこの意味深な発言にのび太は反発する。

「トンカチで頭を叩いてまで、出木杉くんの事でしずかちゃんが思い出す必要がある手がかりなんてないよ！」

「のび太さん……。未来があんなに悲惨な状況になっているのよ。少しでも心当たりがあれば確認しておく必要があるわ」

「でも……」

「ドラちゃん。お願い」

「しずかちゃんがそんなに言うなら……『わすれとんかち』～！」

ドラえもんはポケットを漁って身の丈ほどの大きさのトンカチを取り出した。

ゴクリ……

思わず唾を飲み込んでしまうような大きさだ。

これで頭を叩かれると目から☆が出て口から舌が出てしまうほどの衝撃になる。

しずかちゃんが食らっても大丈夫なのだろうかと心配しつつも、やはりもう引き返せない。

ゆっくりと頭をドラえもんに向けると、ドラえもんも意を決したのか両手で構える。

そして剣士の決闘さながら一瞬の静寂の後、ドラえもんは思い切り俺（しずかちゃん）の頭をぶっ叩いた。

激しい衝撃と共に目から光が照射される。
「こ……これは?」
映し出されている映像は先程タイムテレビで映し出されていた破壊された未来の建物と酷似していたのだ。ただ、異なるのは破壊されていない、ということ。
(どういうことだ?これは今戦争が起きている未来の建物じゃないか?こんな光景を以前に見ていて忘れているとでも言うのか?)
ドラえもんも言葉を失っている。
のび太はこの気まずい空気を嫌ったのかよく分からないことを発言する。
「これってさっきタイムテレビで見てた建物でしょ?それを思い出しただけじゃないの?」
「……いいや、わすれとんかちは忘れている記憶を照射するから、破壊されていない建物の光景を覚えているはずないんだ」
「じゃあ、しずかちゃんは前にこの未来の建物を見ているということ?そんなことあり得ないじゃない!」
「うん、そうなんだ」
この2人のやり取りを聞いて俺はゾッとしていた。
ドラえもんは漫画の世界と思っていたのにまさか自分はこの世界線の住人であり、しかも未来人なのか?そして未来から何らかの方法で現代に来てしずかちゃんに憑依したと言うのか。
しかし……一体なぜ?記憶喪失にも関わらず、逆にドラえもんの漫画は記憶に残っているのも分からない。腑に落ちない点がたくさんあるのだ。

プルルル。プルルル。
その場にいる全員の頭が纏まらない中、再度タイム電話が鳴り響く。
ドラミちゃんか。
「あ、お兄ちゃん!?いま少しだけ時間が取れたので手短に話すわね?」
3人は固唾を飲んで聞き入る。

「どうやら未来からそっちの時代に何らかの方法で渡った人間がいるみたいで、その人が出木杉さんに何か影響を及ぼしたみたいなの！それが原因で出木杉さんが人類を憎むようになってしまったのよ！」
これを聞いて確信する。
記憶は相変わらずないが、未来から来た人間はやはり自分で間違いない。
そしてどういうわけかしずかちゃんに憑依したのだ。これからしずかちゃんの魅力を使って出木杉くんを弄び、最後に捨ててしまうことで出木杉くんは人類を憎んでしまうようになった。
辻褄は合う。
自分が未来を壊してしまった。後悔してももう遅い……。出来心で出木杉くんを弄ぼうとした結果が重大な時空犯罪となってしまったのだ。
タイム電話が切れた後、ドラえもん達と相談して、今後出木杉くんに近づく人間を注視し、怪しい者がいたら報告し合うことにした。張本人が目の前にいるとも知らずに……。
ドラミちゃんは今後の調査と対策について未来で検討するらしい。もし、しずかちゃんに憑依した事がバレたら自分の存在（人格）はタイムパトロールに排除されるだろう。いや……タイムパトロールは今機能していないだろうからドラえもん達が行うかもしれないが、いずれにしろ『催眠グラス』だけではその力に抗う術はない。
どうすれば回避出来るのか必死に考えてみる。そもそもこの悲惨に変わり果てた未来を知ったことで出木杉くんを弄ぼうと思う気持ちはとっくに消え失せているのだ。であれば未来がまた正常に戻ってもおかしくないはずなのだが……。
仮に今から出木杉くんを無視し続けた場合、それはそれで出木杉くんは傷心のあまり人類に敵対してしまう存在になるのだろうか。
このまましずかちゃんの中に留まるのはやはり危険だ。
先手を打って憑依している事実をドラえもんに打ち明けて未来に戻してもらう、という和解案も考える。貢献することで恩赦という形で赦してもらう手だ。

いずれにしても即決できる話ではないし精神的にまいっていたので今日は大人しく家に帰してもらうことにした。

夜、湯船に浸かりながら今後のことを考える。

残された時間は少ないだろう。

そもそも自分はなぜ記憶を失くしてまで現代に来たいと思ったのか。

（この張りのある肌に触れられるのもあと少しかもしれないな……）

恐らく最初の感覚から元の人格は男だったことは間違いない。酒も知っていたからある程度年齢もいっていたはずだ。そんな人間がしずかちゃんの体に憑依したい理由なんて……もはや変態的な発想しか思い浮かばない。

俺はそんな人間だったのか、と落胆する。美少女の体を手に入れることだ。

『○歳独身男！２１世紀の女児の体を乗っ取り未遂！』

なんて平和に戻った未来で大々的に報道されるのだろうか。

いずれにしても暗い未来しか待っていない気がするが、せめて途中になっていた『わすれとんかち』で記憶を戻す作業をしたい。有耶無耶になっていたが、記憶が戻ることで解決の糸口があるかもしれないのだ。

その日、俺はそのまま寝ついてしまった。

チュンチュンチュン

朝のスズメのさえずりをしずかちゃんの部屋で聞くのは何回目だろうか。今までで一番憂鬱な目覚めだ。

今日は日曜日で学校が休みだが最早登校も今後はしたくない。自分はどうせもうすぐ抹消されるのでもう意味がないのだ。

思えばドラえもんの道具も小銭稼ぎ等くだらないことに使っていたな。結局、ドラえもんの道具は夢のある部分が魅力的だったのにコソコソと間接的にお金集めや楽することに使ってきた。

今さら悔やんでも仕方がないか。

俺はドラえもんからの非情な宣告を大人しく待つことにした。
すると急にガチャリと音を立てて目の前にどこでもドアが出現する。
（もう来たのか……）
毎日の定期連絡は１６時のはずなのに朝早くからドラえもんが来るということは、ドラえもんの意思でしずかちゃんに用があって来たということだ。
「待っていたわ。抵抗はしない」
「何を言っているんだい？ドラミがしずかちゃんも一緒にと言っているから来てほしいんだ！」
ドラえもんは嘘が苦手だからまだ知らないのだろうけど、ドラミちゃんから呼ばれたということは既にしずかちゃんに未来の俺が憑依したことまでバレたのかもしれない。
「あ！しずかさん！体は何ともない!?」
ドラミちゃんの第一声だった。
ドラミちゃんは優秀だから演技も出来るだろう。白々しく俺（しずかちゃん）に対して体調を聞いてきてはいるが、出木杉くんをはめた女性が俺だということまで既に調べはついているはずだ。
「ドラミちゃん……もういいのよ」
半ば諦めて神妙にしている俺（しずかちゃん）をよそにドラミちゃんは続ける。
「出木杉さんをたぶらかした女性が分かったの！つまり憑依された人が分かったわ！」
ほら来た。終わった。ドラえもん達の前で暴露して捕まえさせるのか。
「誰なんだい!?」
ドラえもんやのび太は食い入るようにタイム電話を聞いている。
「それは……しずかさんよ！」
部屋は静寂に包まれる。
短かったけど夢のような青春をありがとう。
ドラえもんやのび太は驚いた表情で自分を見ている。

「そ、そんな……！だから『わすれとんかち』の映像は……」
（そうだ。そういうことだ、のび太よ。俺は未来から来てしずかちゃんに憑依していたのだ）
「お兄ちゃん！落ち着いて！しずかさんに未来人が憑依するのはこれから１週間後よ！今のしずかさんはまだ本人よ！」
「え!?でも『わすれとんかち』で未来の映像が出ていたよ?」
　既に憑依されていると思っているのび太が痛いところをつく。対してドラえもんも見解を述べる。
「いや……。『わすれとんかち』は忘れている記憶が照射されるんだ。これから憑依されるとして誤作動を起こしたのかもしれないよ……！」
　ふふ……。『わすれとんかち』は正常だよ、ドラえもん。ドラミちゃんが言う憑依の日にちに誤差が出ているようだけど、しずかちゃんはとっくに未来人の俺に憑依されているのさ。
　事実を知っている俺だけがドタバタしている３人の様子を冷静に見ている。
「ドラミ！どうすればいいんだ!?対策はあるのかい!?その未来人は誰なんだい!?」
　それだ。それは俺自身も知りたかった。
　なぜ俺は未来からしずかちゃんに憑依しようと考えたのか。なぜ記憶がないのか。
「憑依マシーンは試作段階だったようなのだけどしずかさんに憑依しようとしている女性は自分の体にコンプレックスがあったようなの」
　女性という言葉を聞いてドラえもん達を除いて逆に自分だけが驚き固まってしまった。

8. 真相

未来から来た人は女性？
自分の一人称は‘俺’，だから、やはり別の人なのか？
……いや、ドラミが俺を油断させるために言っている可能性もある。
　気を張る自分をよそにドラえもんが質問する。
「その女性って誰か分かるのかい？」
「いま過去ログや映像を追っているからもうすぐ分かると思うわ！対策案はいま練っているけどもうすぐ決まるそうよ！」
　やはり未来技術があれば対策は時間の問題のようだ。自分が捕まることが先延ばしされている現在、ここでカミングアウトして楽になったほうがいいのかもしれない。
「だからしずかさんは申し訳ないのだけど少しそのまま待機していてほしいの！」
　突然ドラミがしずかちゃん（俺）に振ってくる。
　この時が来た。
　ドラミはやはり今のしずかちゃんが既に憑依されていることを知っているのだ。
　でなければいまこの場に拘束する意味なんてない。すぐに打ち明けてこないのは、逃げたり暴れられないようここに釘付けにするためなのかもしれない。
　ドラミはそのまま続ける。
「これから対策についてしずかさんと二人で話したいから、お兄ちゃんとのび太さんはちょっと席を外してくれないかな？」
　ドラえもん達に知られないようにしているのだろうか。さすがに子供ののび太にはショックが大きいと判断したか。しかしそれだとドラえもんまで席を外す意味はない。だとするとしずかちゃんの尊厳を守るためヒッソリと俺の人格を処理するつもりということか。
　……または俺の人格を排除せずにどこかの受け皿に逃がすことで穏便に済ませようとしている可能性もある。それは俺がしずかちゃ

んの体を人質にとることを恐れたからかもしれないが、恩赦があるのであればこちらも最初から協力的に行きたい。
(どっちだ……)
　ドラミの顔は見えない。あの愛くるしい顔で作られた黄色いロボットはいまどんな表情をしているのだろうか。
　ドラえもん達は特に抗議することなく部屋を出ていき、タイム電話ごしにしずかちゃん(俺)とドラミだけになった。
「………」
　出方を見るため大人しくしているとドラミが切り出す。
「ちょっと待ってね。……いまそちらに飛び立ったわ。憑依移動は成功よ」
「……?」
(何を言っている。探りか?慎重に言葉を選ぶ必要があるな)
「混乱するだろうけど落ち着いて聞いてね。順に説明していくわ。まずは確認だけどあなたは今しずかさんではない。それで合っている?」
「!!!」
　やはりバレていた……!くそ!ドラミめ!今まで演技しやがって!
　怒りと焦りの気配が伝わったのかドラミは慌てて説明を続ける。
「あ、ごめんなさい!あなたが悪意を持って今しずかさんに憑依しているわけではないことは知っているので安心して!しずかちゃんでいた間の多少の悪事も記憶喪失だったから免除されるわ」
(ぜ、全部ばれている……!!)
　悪意がないなんて言うが、俺は既に道具を借りパクしたりしずかちゃんの体を堪能したりと、充分悪事を働いている。
　しかし最早ここで抵抗する意味もない。しずかちゃん(俺)は言われるがまま答え始める。
「なぜバレているのか分からないが……俺はしずかちゃんではないはずだ。それだけは分かる」
「……良かった!やはりしずかさんへの憑依が成功していたのね!あ

なたは先程、未来からしずかさんに憑依するために飛び立ったエージェントよ」

「……!?」

いったいドラミは何を言っているんだ?

俺がエージェント? 全くピンと来ないし自覚もない。

そんな自分の心境を代弁するようにドラミは続ける。

「未来から現代に意識を飛ばした際に持っていける記憶は潜在記憶だけだったからほとんど記憶喪失のはずよね。でもこれから説明することによって顕在記憶も少しだけ再構築出来るわ。ミッションが成功するかどうかはここにかかっているの」

相変わらず理解に及ばない言葉を並べている。

しかし、潜在記憶と顕在記憶……。この意味は言われてみるとその意味を思い出してくる。

記憶は大きく2つの種類に分類できる。

例えば『沖縄旅行に行った』、などのエピソード記憶や『沖縄の場所』、などの意味記憶は意識的な想起を伴う記憶であり顕在記憶の分類となる。対して海水浴する際の『泳ぎ方』、など経験の記憶は潜在意識と言う。

確かに走り方や箸の使い方など技能を伴う行為、いわゆる潜在記憶はしずかちゃんになった最初から苦労しなかった。しかし顕在記憶は一向に思い出せていないのだ。

とはいえドラえもんの漫画の話や道具の性能は川のせせらぎが如く自然と頭に湧いてきた。

あれらは知識という事実の記憶という意味では顕在記憶ではないだろうか。

「あなたの本当の名前を言っても思い出せないかもしれないけど、まずは心を落ち着かせるために伝えておくわ」

「あ、ああ……」

ゴクリ……。

「あなたの名前は天衣酢流蔵（てんいするぞう）と言います。年齢は32歳。男性です」

「……!!」

衝撃的だった。名前のダサさもそうだが年齢もそれなりに重ねている。唯一男だったことだけ納得した。そして何より自分の個人情報を聞いても何一つピンとこないことにも驚きを隠せないでいた。
「やっぱり思い出せないようね。あなたの個人情報は転移するにあたって優先される情報ではなかったから再構築対象でもなかったわ」
「こ、個人情報が重要じゃないって……」
「あなたは今回未来で引き起こされたロボット戦争を阻止するためにしずかさんに憑依したのよ。その目的に必要な情報を厳選して潜在意識となるまで頭に叩き込んだの。急いでいたしあなたは個人情報は二の次にしたのね」
意味が分からない言葉をドラミは平然と喋り続ける。
（一体ドラミは何を言っているんだ……）
自分がしずかちゃんに憑依したことでロボット戦争を引き起こしたと思っていたのに、実はロボット戦争を阻止するために現代に憑依してきただと？
「そちらの時代で言うと今から一週間後にロボット戦争を引き起こすきっかけをつくる女性がしずかちゃんに憑依するため移動してくるわ。それを阻止するためあなたは先にしずかちゃんの体に憑依したのよ！」
「なんだって!?ということは出木杉くんを暴走させたのはしずかちゃんにこれから乗り移ろうとしている人格ということなのか？」
最早、自分が男だと分かり俺は口調も気を使わずに話し始める。
「記録を調べた限りそのようよ！転移した女性の人格はしずかさんに憑依した後、出木杉くんを振り回していたわ。最終的に出木杉くんは弄ばれて捨てられたの！出木杉さんはしずかさんは元よりのび太さんやお兄ちゃんを憎んだあげくやがて人類そのものを憎むようになり、破壊ロボットの基礎を作っていくことになるの！」
何という話だ。それが本当なら俺は時空犯罪者から一変して、大事な使命を帯びた者になるではないか。
しかし、引っかかることがある。
「だったらその女性がしずかちゃんに憑依する前に取り押さえればいい

いだけじゃないか?」
「それが、未来の技術を使って妨害されているのよ。歴史が変わってしまった今、タイムパトロール隊もいないし、止めるにはこの手段しかなかったの」
なるほど。自分を送るしか手がなかった理由としては少し納得がいく。
そして自分は出木杉くんに関わる任務についていたことで、こちらの時代で無意識に出木杉くんに興味を持ったのも頷ける。
しかし、自分の個人情報を捨ててまでしずかちゃんに憑依することを選ぶ動機が自分にあったとは思えない。
「なぜ俺がしずかちゃんに憑依する人員に選ばれた?自分から志願したのか?任務が終わったらそちらに帰れるのか?」
正直、記憶のない未来に帰りたいとは思わなかったが本来の自分に戻りたい気持ちはあった。美少女のしずかちゃんの体に対して32歳の男の体など比較するまでもないはずだが、何かこう懐かしくも戻れない遠い故郷のような存在に見えて仕方がないのだ。
しかし、ドラミはこちらの希望とは裏腹に回答を拒否する。
「任務成功のため、今は自分から志願した、ということしか言えないわ」
肝心な部分を言ってくれない分、やはり100%ドラミを信じてよいのか判断がつかない。
何か大事な事を煙に巻いている感じだ。
ただ、俺自ら志願したのならばそれが自分の信念に繋がっているからなのだろう。この時代に来て多少の悪事を働いてしまったが、やり遂げればまた本来の自分に戻れるかもしれない。挽回できる機会はあるのならば今はそれを信じてロボット戦争の阻止はしなければならないと思った。
「分かった……。で、何をすればいいんだ?」
「女性が憑依してくるのは今から約一週間後よ。あなたはその間、睡眠を取らないでいてほしいの!」
「え、それだけ?しかし一週間なんて人間には無理だろう。……いや、

ひみつ道具を使えば何とか可能か」
「さすが天衣さん。話が早いわ。道具の使い方を潜在記憶になるまで頭に叩き込んだだけあるわ」
「なるほど。だからひみつ道具のことを詳細に覚えていたのか」
「そうよ。お兄ちゃんがそちらの時代に行った話は未来では漫画として玩具の説明書になっているわ。そしてあなたはお兄ちゃんの道具を使って女性の憑依を迎え撃つの」
「迎え撃つと言っても、寝ないだけなら簡単だろう。しかし、なぜそれが対策になるんだ?」
「憑依はノンレム睡眠中に実施されるからよ。だから憑依される期間に寝ないでいれば女性の人格はしずかさんを乗っ取ることが出来ずに消滅するの」
　確かに自分が憑依した際も睡眠中だったのかもしれない。
「ふーん。それだけでいいのか?それだけだったらひみつ道具の使い方を頭に叩き込む必要なかったよな。というか俺が憑依する必要がなかったのでは?ドラえもんに連絡してしずかちゃんに協力してもらえばいい」
「……そ、それは万が一寝てしまった際のことを考えたからよ」
　急に声のトーンが変わったドラミに俺は違和感を覚えた。

9. 決戦前夜

「万が一寝てしまう可能性もあるということ?」
奥歯に物が挟まったようなドラミの言い方に俺は違和感を持ち問いただす。
「憑依マシーンは未来でも試作段階なの。余り試せてもないし、憑依時に対象を眠らせる機能を有している可能性もあるわ」
「なるほど。もし俺が寝てしまった最中に女性の憑依が開始された場合どうなる?まさか俺の人格と締め出し合いが始まるのかい?」
「察しの通りよ。夢の中でひみつ道具を使ったしずかさんの体の奪い合いが始まるわ」
半分冗談で聞いたつもりだったのにドラミは真面目に回答してきた。
「道具を使って……?まさか夢の中で『トッカエ・バー』とか使って体を取り替えてくるわけじゃないよね?」
「いいえ、そのとおりよ。厳密には恐らく『入れ替えロープ』を強引な方法で使ってくるわ。しずかさんの夢の中だからしずかさんが知っている道具を使ってくるの。交換が成功してしずかさんの体をあなたから乗っ取ったらあなたは用済みになって夢の中で抹殺されるわ。その時はミッション失敗よ」
「抹殺って……相手が殺しにかかってくるのか?俺は死んだらどうなる?」
「……文字通り死よ。あなたの人格は消滅して無になります」
「マジか……」
安易に請け負ったが死が伴うと聞いて一気に足がすくんでくる。
「ま、まぁ寝なきゃいいんでしょ……?というか何でひみつ道具を使ってくるんだ?もっと本格的な未来の兵器とかあるのでは?」
「しずかさんの脳内が戦場だからあくまでしずかさんの常識や情報に限られた物しか使えないの。あなたが漫画の内容を覚えて行ったのもしずかさん自身が知っている道具を把握するためよ」
「な、なるほど。『入れ替えロープ』は漫画でしずかちゃんも使ってい

た。ちなみにこちらもひみつ道具を駆使して乗っ取りを阻止するということか」
「ええ。しずかさんが知っている道具ならばこちらも使えるわ。ただ、道具によるこちらの攻撃は相手に効かない可能性が高いわ。だから夢の中では相手の人格が消滅するまで逃げ続けるしか手はないかもしれない」
「ええー……相手の人格は未来技術で防御されてるってわけか。ちなみに侵入してきた人格はいつぐらいに消滅するんだ?」
「現実時間で約1時間だから夢での体感はおよそ2時間でしょうね」
「2時間も?その間、道具を使って逃げ続けろってことか……」
まぁ寝なければこの夢の中の鬼ごっこは発生しない。そこまで気にする必要はないだろう。
やはり問題はその後だ。
ミッションが成功したら俺の悪事は帳消しになり元の体とやらに戻って記憶も蘇るのか、そこだけはどうしてもハッキリさせたい。
「終わった後、俺がどうなるのかもミッションの成否に関わっているのか?」
「……あなたのやる気を削がないためと思ったのだけどやはり知りたいわよね。私も伝えるべきと思っていたので1つだけ関連する重要な事項を教えます。恐らくこれはあなたの今後にも共通しているわ」
「なんだい?」
「ロボット戦争が起きてしまった歴史だとしずかさんはすぐに亡くなってしまったの」
「何……!出木杉くんのロボットにやられたのか?」
「いいえ……。自ら命を絶ったのよ。最後に『誰か私を止めて』と言い残して」
「どういうことだ?乗り移った女性の人格が乗っ取っていたんだろう?」
「それが……どうやら憑依機能は完全ではなかったの。恐らく女性の人格は時が経って自然消滅したようよ」
「じゃあしずかちゃん本人が体を取り戻せたんじゃないの?だとする

となぜ自殺なんかしたんだ……」
「しずかさん本人の人格に戻ったのは間違いなさそうよ。しかし侵入した女性の人格が消滅した後、負の感情がしずかさんの心の中に残り続け、しずかさんはその感情を自覚しつつも制御出来ずに悪行を繰り返してしまったの。出木杉くんを誘惑し絶望させたのもしずかさん本人がやったものだと錯覚していたかもしれないわ。だから良心の呵責に苦しみ自ら命を絶ったのよ」
「なんてこった……。ん…?ドラミ……それじゃあまさか……」
「ええ。あなたにもしずかさん本人の習慣や趣味嗜好が徐々に戻ってきているでしょう。あなたの人格も残り時間がなくなってきているかもしれないの……」
「そ、そんな……」
　自分が原因で未来のロボット戦争が引き起こされたわけではないことを知り、希望が見えてきた矢先の非情宣告。無事にミッション終了後、どこかの世界で平和に生きていけるだろうと勝手に期待していた自分がいた。それが脆くも崩れ去り一転して絶望感が心を支配する。
「そのことは……転移する前の俺も認識していたのか?」
　俺は絞り出すようにドラミに問いただす。
「ええ。あなたは自分の命を顧みずにこの任務に志願したの。だから私も真実を打ち明けたわ」
「……」
(分からない……。動機が思い出せない。人類を救うために俺は命を投げだすような男だったのか?)
　かと言ってさすがにドラミがここで嘘をついているとも思えない。
「何か戻る方法がないのか……?」
「望みは薄いけれど一応いま未来で確認中よ」
「そ、そうか……」
　記憶がない現状、しずかちゃんを堪能した自分にバチが当たったとしか思えてならないが、後はドラミ達に任せるしかない。取り敢えず今は目の前のことだけに対応する。どうせ死ぬならば皆に感謝され

ながら消えるほうがマシだからだ。
「……もうドラえもん達を呼んでいいかい？寝ないための道具の相談をしたい。彼らには俺がしずかちゃんに憑依していることが最後までバレなきゃいいんでしょ？」
「そ、そうね」
ヤケクソだがやってやる。ミッションも簡単だ。ドラえもん達に協力してもらって女性の人格が憑依しにくる期間だけ道具で寝ないようにすればいいだけだ。
『瞬間昼寝ざぶとん』で一瞬だけ寝ることも可能だし、完全に寝ない条件なら『ケロンパス』で自分の疲れを吸い取ればいい。
なんなら『記念日シール』をカレンダーに貼って、その女性の人格とやらが来襲する日を指定すればいい。しずかちゃん自身への道具の使用については未来技術で妨害されないはずだ。
ドラえもんとは大体の意識合わせが出来た。憑依日前後の３日間をまったく寝ないで過ごすことにし、もしものために横にドラえもんとのび太が待機して自分の状況を見ておく算段だ。
相手が強引に眠らせようとしてきた場合はこちらも強引に起こすまで。
後はその女性とやらの人格がこちらに憑依してくる日に備えて、寝貯めとは言えないまでもたっぷり睡眠を取っておく。
準備は完璧。３日間寝ないと体に負担がかかる事はしずかちゃんには申し訳ないが、乗っ取られるよりはマシだろう。俺もこれが終わったら早々に出ていくつもりだ。
しかし、思えばしずかちゃんはまさに理想通りの女の子だった。成長した大人のしずかちゃんも楽しみたか……見てみたかったが、俺の邪な心がしずかちゃんに悪影響を及ぼすかもしれないし、賢者な気持ちになっている間に退散するとしよう。
少しの間だったけど美少女に成り代わった人生を見せてくれてありがとう。
ただ、最後の……思い出と言っちゃなんだが今夜のお風呂だけは楽しませてほしい。

認めよう。俺は変態だ。半ば自暴自棄になっているが、こんな状況でも……いや、こんな状況だからこそ『美少女に憑依した』というあり得ないシチュエーションを男として存分に味わってからひっそりと消え去りたいのだ。

決心がつくと駆け込むように風呂場に入り手慣れた手つきで身にまとっている衣服をサッと脱ぎさる。

そしてバスチェアに座り、鏡を見ながら貪るように体をなで始める。

最初は胸だ。先端をたまに指で弾きながら優しく包み込むように丁寧に愛撫する。

しずかちゃんの弱いところは最早熟知しているのだ。しばらくすると体が暖まり、徐々にほぐれてくるのを実感出来る。

自然と吐息も荒くなり頭もボンヤリしてきた。

鏡に映る少女はそのまま抵抗する事もなく自ら足を開き、大事な部分をまさぐりだす。

ツルンと指が入りそうなほど準備が整っていることが分かるが、今後の事を考えると中は傷つけたくはない。だから外側を中心に円をなぞりながらなめるように触れる。時折つまんだりすると、まるで電気が体を駆け巡ったように下半身から快感の波がこみ上げてきて、制御できない声が出てしまう。勝手に発声されるしずかちゃんの声を聞いて、自分がこの子を気持ちよくさせている錯覚に囚われ、さらに興奮を掻き立てる。まさにしずかちゃんと一心同体となって一緒に感じている感覚だ。

そして、やがて来る至高の瞬間が近い事を悟り、先ほどまでの優しい動作と打って変わって、激しく責め立てる。

「もう……イッ……」

のけぞりながらも恍惚とした表情で最高潮に達しようとしていたその時。

ピンクのドアが目の前に出現し、ガチャリと扉が開く。

(え……?うそ?もしかして……)

「のび太さ……ん――――!!!!」

卑猥な声が浴槽に響き渡った。
恐らく突如のび太が『どこでもドア』でしずかちゃんの浴槽へ飛んで来たのだろうが頭が飛んで何も考えられない。
「わわ!ちょ……しずかちゃん、かけないで!」
一体のび太は何を言って……シャワーなら止めていたはず。
兎に角、辱められたしずかちゃんの心境が急激に伝わってきてさすがに胸が痛い。まだのび太は興味津々でビクついているしずかちゃんを凝視しているではないか……
心配して『どこでもドア』で駆けつけたとのことだったがこいつは必ずお風呂に来る奴だということをすっかり忘れていた。
この日落ち着いた後、のび太を無茶苦茶にしてから記憶を消去したのは言うまでもなかった。

そして……女性の人格が未来から憑依しにくるXデー前日があっという間に訪れた。
『日本標準カレンダー』を使って予め平日を3日連休に設定しておき、友達の家に泊まるふりしてのび太の家に集まることになった。
「しずかちゃん!僕たちがついているから安心してね!」
先日の事はとっくに忘れてのび太が息巻いているが恐らく何か頼むことはないだろう。万が一でも眠気が起きないように疲れて体力を失うようなことはしない。
ひたすらドラえもん、のび太、しずか(俺)ちゃんの会話が続いたが、数分してのび太に異変が起こる。
「のび太さん!?」
のび太が座ったまま白目を向いているのだ。
(まさか、しずか(俺)ちゃんが寝ないからのび太に憑依しに来たのか!?)
「ああ、暇で寝ちゃっただけだと思うよ」
なんだ。そういうことか。紛らわしい奴だ。
しかし、今のところ何か起こる気配はなく、暇なのは頷ける。
「やっぱり明日ぴったりに来るのかな?今日は暇かもしれないわね」

「そうだねぇ……じゃあこれを使おう！『驚時機』〜！これでこの部屋だけ時間の流れを早く出来る」
さすがドラえもん。体感時間が縮まれば精神的な疲労も溜まらない。寝ないで乗り切れそうだ。
こうして前日は何事もなく過ぎ去り、あっという間に当日を迎える事となった。
運命の日だ。
ここで人類の命運が決まると言っても過言ではない。そんな日だと言うのに今日は何だか耳鳴りがひどい。心なしか頭の奥底で女の声がまとわり付くように響いている気がする。一日寝ていない疲労が現れ始めているのかもしれない。
「どう？何か変化はあった？」
ドラえもんとのび太は交代で見張りについてくれており、しずかちゃんに定期的に話しかけてくれていた。
「うーん、ちょっと耳鳴りがしているけどおかしな事は起きていな……」
全てを言いかけて俺は異変に気がついた。

『寝なさい』

声だ。女の声が聞こえる。
しかもそれは頭の中からだ。
これは幻聴ではない！
ついに来た。仕組みは分からないが、思念体のように物質を持たない状態で既にしずかちゃんの中にまで来ているのだろう。
過去の美少女であるしずかちゃんに目をつけ体を乗っ取ろうとしている謎の女。素性は聞いていないが負の感情を残すほどだし、人の体を乗っ取ろうとしている時点で悪意がある。（俺も人の事を言えないが）
しずかちゃんの体まで来たものの一向に睡眠状態にならないしず

かちゃんに焦りを感じているはずだ。頭の中で喋りかけられるのはうっとおしいがこのまま起き続けて消滅させてやるぜ。
「来たわ!」
年のためドラえもん達にも知らせて備えてもらう。
『寝なさい。なぜ寝ないの?もうとっくに夜中なのよ?』
大分、大胆に語りかけてくるようになってきたが、どうやら強引に寝かせることまでは出来ないようだ。このままタイムアップに持ち込んでやる。
女の声はこの後も聞こえ続けるが、年のため『驚時機』で時間を早めることはせずに様子を見ることにした。
すると女は消滅の気配を察したのか懇願するようになる。
『お願い、時間がないの。早く寝てくれないと……』
自分が消えてしまうって言いたいのだろう。しかし、それは自業自得だ。間接的であれロボット戦争に繋がる時空犯罪になっているんだ。見逃すわけにはいかないし、俺はしずかちゃんを純粋に守りたい。
『そうか……。やはり私は……』
急に女の声がしおらしくなる。
(何なんだこの女は)
同情をするつもりはないが、何かどこかで聞いたことがあるような声でもある。
「……ドラちゃん。ドラミちゃんにタイム電話してくれる?」
ドラえもんは何も言わずにドラミに電話を繋いでくれた。
「しずかさん!?もしかして今きているの?」
「ええ……。頭の中にいるわ。私はこれから敢えて寝て、この女の人と会ってくる」
「どうして!?寝ると危険なのよ?」
確かにひみつ道具を使った攻防は検証した所、逃げる側は不利で危険だった。しずかちゃんが把握している道具に限定されていても防御や回避系の道具より攻撃系のほうが強く、しかも相手には攻撃が効かない可能性が高いからだ。

「でも私は会わなければいけない気がするの。危なくならないように
ドラちゃんとのび太さんにも協力してもらうわ」
「しずかさん……」
「ミッションが無事に終わったら全てを教えて頂戴ね？」
「……!!」
突然、何かを悟ったような俺の言葉にドラミは言葉を返せず絶句していた。

１０．夢の中の攻防

「寝たらあなたは夢の中で体を取り替えられて殺されてしまうかもしれないのよ？ このまま寝なければいいだけなのになぜ!?」

　ドラミの言い分は分かる。何よりロボット戦争を回避する使命がある中でそのような危険を犯す必要性がない。

「でも……私はこの女の人の知り合いなんでしょ？ 声を聞いて何となくそう思うの」

「天衣さ……」

　思わず口に出た本当の名前を言いかけてドラミは固まった。

「一応道具を使って逃げ切るシミュレーションをしてきたわ」

　憑依日が近づいてくる期間、念の為に俺は道具を使った逃走劇のイメージも行っていた。抵抗する間もなく体を入れ替えられてしまうような最強道具があると太刀打ちできないが、幸い相手の意思関係なく何でも出来てしまう『ソノウソホント』や『魔法事典』をしずかちゃんは知らないから夢の中では使えない。

　効果が強力である『もしもボックス』はしずかちゃんも存在を知っているが、この道具は使った人が選択した世界に連れて行く方式なので周りの人間に影響を及ぼす物ではもなかった。

「ドラちゃん、念のため『みちび機』を使わせて」

　みちび機は、人を導くおみくじで、悩み事を言ってからボタンを押すと、おみくじが飛び出てきて、それに書かれている助言に従えば必ず良い結果が得られる。

　その結果を見ても夢の中で決着をつけたほうが良いと出た。

　後は夢の中で行動するに当たって入念な計画をたてるだけだ。しずか（俺）ちゃんは『ユーメー人』を使って見たい夢を見る。

　のび太には『夢はしご』でしずかちゃんの夢に入ってサポートしてもらう。いざとなったら身代わりにもなってくれるだろう。夢の中だし死んでも問題ない、はず。

　ドラえもんには『ゆめグラス』、『ユメテレビ』でしずかちゃんの夢を覗いてもらい『ユメかんとくいす』と『ゆめコントローラー』を使っ

て場をコントロールしてもらう。そして『ゆめスピーカー』で夢の中にいる俺とのび太に指示を出す。
　夢を操る道具のオンパレードだ。だが相手も道具を使ってくる以上、万全を期しておくことに越したことはない。
「じゃあのび太さん、行きましょう。ドラちゃん、指示お願いね！」
「うん、オッケーだよ。気をつけて！」
　こうしてしずかちゃんとのび太は満を持して女性の人格が待ち受けているであろう夢の中へ眠りについた。

　気がつくとそこは一面を見渡せる草原であった。ドラえもんがしずかちゃんの夢をコントロールして不審者の接近に気づけるよう最初の場面を敢えてそうしたのだ。夢の中という実感ができないほど意識はハッキリしており横にはちゃんとのび太もいる。
「誰もいないね……」
　のび太は恐る恐る辺りを見渡した。

　ついに危険を承知でここに来てしまった。もう後戻りは出来ない。未来の運命を託されている身として何もせずに失敗することだけは許されない。
「のび太さん、今の内よ」
　夢の中で女性の人格が姿を現して攻撃を仕掛けてくる前にやるべきことをやっておくことにした。

　そして数分たった頃
「ふぁ～あ……。来ないね。ここの場所が分からないんじゃないかなぁ」
　のび太が大きなあくびをしながら気の抜けた声を出す。確かにここは実在しない場所だ。
　恐らく女の憑依者は最初に源家を訪ねているかもしれないが、相手

もこちらを探している時間はあまりないはずだから効率的に向かってくるはずだ。
となると使ってくる道具は……。
シュルルル
突如、目の前にピンク色のドアが出現する。のび太が風呂場に来て以来、若干トラウマのようになっている道具だ。
(やはりどこでもドアで来たか！〝しずかちゃんがいる場所〟を指定したな！)
「わっわっ……来たよ！どうする!?」
「のび太さん、落ち着いて！まずは話しかけてみるのよ！」
全容を現したドアは静かに開き始める。
一体どんな女の人なのか。姿を見たら俺は思い出すのだろうか。いずれにしろお互い消え去る可能性が高い身だ。憑依を狙ってぃる女の人もいくらなんでもロボット戦争は望まないだろう。事実を話して可能であれば平和的に解決したかった。
しかし
ドアから姿を現したのは黒い影のようなシルエットであり、かろうじて人の形をして髪型が分かる程度ではあるものの、とてもじゃないがそこから誰かを連想できるような様相ではない。
「ゆ、幽霊!?」
のび太が驚いてそう表現するのも無理はない。表情すらないその影はこちらを視認するなり、四次元ポケットを召喚する。
(早速道具を使う気か!?ということは対話は無理……)
こちらの考えがまとまる前に影はポケットから『入れ替えロープ』を取り出すと、しずかちゃん目掛けてムチのように飛ばしてくる。
突然の攻撃にしずかちゃんは為す術なくグルグル巻きにされた。
ロープに縛られることで、小ぶりの胸がさらに強調されている。
そして抜け出そうともがくことで見る見るとスカートはまくしあげられていき、大自然の草原の中で妖美な白い生足が少しづつ公開されていく。
実に艶めかしい光景だ。

「ああ！しずかちゃん！」
のび太が興奮しながら声を上げた。
影はそのまましずかちゃんを手繰り寄せると無理矢理に手を取って『入れ替えロープ』を持たせる。入れ替えロープの端をそれぞれが触ることで対象の者同士が入れ替わるという条件が早速揃ってしまったのだ。

「どういうこと？！」
入れ替わりが発動した様子もなく、影が言葉を発した。
そして、スカートからはみ出しているしずかちゃんの桃尻の部分。そこに張りつく白いシルクの布地から尻尾のような物が伸びているのに気がついたのだ。
「やいやいやい！このロープをほどきやがれ！てやんでぃ！」
さらにしずかちゃんは急に江戸っ子の言葉づかいで文句を言い出した。
明らかにいつものしずかちゃんではない。
「その尻尾に口調と赤い鼻……まさか『コピーロボット』を使ったわね!?」
影は荒々しくのび太のほうに振り向く。
「しずかちゃんを複製していたことがバレちゃったよ！逃げるね！」
のび太は自分の胸ポケットを見ながらどこでもドアで移動を開始する。ポケットの中には一寸法師のように小さくなったしずかちゃんがいた。当然、これが本物のしずかちゃんだ。
『スモールライト』で小さくなってのび太のポケットに退避し、女の人の影の出方を見ていたのだ。
影は明らかに攻撃的であり問答無用でしずかちゃんと入れ替わろうとしてきた。
対話が出来る余地が見えない。
どこでもドアでのび太家に移動したのび太はオロオロとして動き

回る。
「どうする?しずかちゃんロボットを置いて来ちゃったけど……」
「夢の中だし気にする事はないわ!それより『かげながら』と『ガードマンロボット』を発動しましょう!」
どちらもボディガードの機能を有する道具だ。相手が攻撃的である以上、こちらも防衛せざるを得ない。
するとやはりピンクのどこでもドアが目の前に出現し始める。
「来た来た来た!」
「のび太さん落ち着いて!こちらも同じようにどこでもドアで次の場所に逃げればいいだけなのよ!」
どこでもドアを使った追いかけっこが始まった。しかしこれは一応想定通りだ。このためにしずか俺ちゃんはスモールライトで小さくなり、一人の移動だけで済むようにしていた。2人で移動しているとその分ドアの出入りが増えていつか追いつかれるからだ。
のび太家としずか家を往復する形で逃げ続け、影を振り切る。どこでもドアより早く相手の元へ行く手段はないため、地味だがこれが最良の手となるはずだ。
そして、どこでもドアを使った鬼ごっこは数回続いたが、しずか家に来た所で影による追跡がピタリと止まった。
「はぁはぁ……。しつこい奴だなぁ!追いかけて来なくなったけど諦めたかな!?」
「うーん、緩急をつけてるだけかもしれないわ。それより話せる機会が全くないわね」
「そうだね!一体何なんだあいつ!」
あの影のシルエット……。自分は明らかに会ったことがある気がするのだが、やはり思い出せない。会話することで糸口があるかもしれないのだが、全く相手はその気がないようなのでどうしようもないのだ。
(『メッセージ大砲』で言葉を遠隔で送ろうにも相手の名前が分からないから送れないし……)
何か手がないか考え込んでいるといつの間にか足下に見覚えのな

い手紙が落ちている。
「のび太さん……これ、あなたが置いた？」
しずか（俺）ちゃんはその手紙を拾い上げて開封する。
ドラえもんであれば『ゆめスピーカー』で直接話しかけるはずだから作戦外のことはしないはず。とすると差出人は影の女かもしれない。
　向こうから手紙を使って話しかけてきた？
　一抹の期待を胸に、手紙の内容に目を通した俺達であったが、その希望とは逆の文言に驚愕する。
『あなたの体を盗みに行きます　怪盗X』
　ゴゴゴゴゴゴ……
　ジョジョの効果音が聞こえてきそうなほどの衝撃だ。
（こ、これは……『怪盗セット』!!）
　怪盗になりきって狙った獲物を盗む道具だ。これで身体能力を上げてどこでもドアの追いかけっこに追いつく算段なのだろう。
（すぐに来なかったのはこのためだったのか！早くもどこでもドアの追いかけっこを無効にしてくる辺り、道具を熟知しているか、予め予想して動いてきている……！）
「のび太くん、しずかちゃん！『ゆめコントローラー』で場面を変えようとしたけど作動しないんだ！影が妨害しているからかもしれない！」
　天からドラえもんの声が聞こえてきた。
　やはり未来技術で影に影響がある行為は無効化されているようだ。
（待てよ……。しずか（俺）ちゃんがいる場所なのに場面転換が無効化されてるってことは……）
「ドラちゃん！『○？占い』を出してくれない？」
　ドラえもんは呼びかけに応じて『○？占い』を目の前に配置してくれた。
「今すぐここを逃げたほうがいい？」
　そして俺は間髪入れずに質問する。
　答えは……○！

「影は私達の半径３０メートル以内にいる!?」

○!!

「まずい！既に近くまで来ていたんだ！」

ガシャーン!!

叫んだと同時に怪盗シルエットの影が窓を突き破り部屋の中に侵入してくる。

「あ、あ、『あい手ストッパー』オン！」

のび太くんが道具を掲げる。

「のび太さん！影への直接足止めは無理よ！」

「そ、そうか！」

この一瞬のやり取りが次の行動への遅延となる。

影が『空気砲』を撃ってきたのだ。

激しい衝撃が部屋の中を駆け巡りカーテンがたなびく。

ただ、のび太としずかちゃん（俺）の周りはその衝動でボロボロになっているが、本人達は無傷だ。

「さ、さすが『バリヤーポイント』だね。見えない壁が守ってくれてるや」

のび太が先程仕掛けておいた道具に感心している間にしずかちゃん（俺）は鏡を指さす。

物理攻撃である空気砲は防げたが、間接的な攻撃は防げない。命令系の道具を目の前で使われたらアウトだ。

のび太は我に返って『入り込み鏡』を使い、鏡の中の世界に退避する。

そしてそのまま走って外に逃走を開始した。

「部屋に仕掛けていた『ガードマンロボット』が防いでくれている間に遠くまで行きましょう！鏡の中では『どこでもドア』は使えないわ！」

「わ、分かった！」

「それと私を元の大きさに戻して！」

最早、のび太の胸ポケットに入っているメリットもないため、しずかちゃん（俺）は元の大きさに戻る。

「このまま逃げ切ろう！」

「そうね！」

返事はしたものの、やはりどうしても影の存在が気になる。このままヒッソリと影を消滅させてしまっていいのだろうか？

俺

人類の事を考えると選択する余地はないが、しずかちゃんは何か心に引っかかるものを感じていた。

１１．対峙

「待って！この辺でもう一度『〇？占い』をしてみましょう！」
しずかちゃん（俺）はのび太に提案する。

鏡の世界に入って相手の姿が見えないぐらい離れている現在、どこでもドアが使えない限り影がこちらに接近できる手段はほとんどない。

唯一あるとすれば『尋ね人ステッキ』で棒が倒れる方向に向かうことだが、尋ね人がいる方向に棒が倒れる確率は７０％だからどうしても何度か試しながらになり遅れるはずだ。

だから余裕がある今、自分達と影との距離を確認し、あわよくば安全な距離から対話を試みたかった。

なぜ過去に来てまでしずかちゃんの人格を乗っ取りたかったのか。女性の影の動機を知ることで、自分がここに来た理由も分かるかもしれないのだ。

「影はここから１００メートル以内にいる？」
〇！
「５０メートルは？」
?!
「程よく距離を置けているようだね！」
「見晴らしのよい裏山に行って待ち構えましょう！」
「え？このまま逃げ続ければいいのにどうして？アイツはいきなり攻撃してきたじゃないか！」
「ダメそうなら諦めるわ。でもいま追ってきている影の女性はもう冷静になっているかもしれないし、話せば分かる人のような気がするの」
「しずかちゃんがそう言うなら……」
こうしてしずかちゃん（俺）とのび太はしばらく丘の頂上で待ってみることにした。

見渡すといつもの街並みが眼前に広がっていた。無音の世界では

あるものの心地良いほどの晴れ渡った空が遠くまで続いている。もうすぐこの世界からお別れと思うと急に寂しい気持ちが込み上げてくる。記憶がないせいか、本当は未来の人々を救うという使命に現実味を感じていなかった。

実際、今の俺を動かしているのは『この世界で生きているしずかちゃんの人生を守ること』と影の女性と俺の関係を知りたいということだけだ。だから出来ることならこのまま影の女性と和解して穏便に終わらせたかった。

しかし

丘の麓からガサガサと木々をかき分けて登場した影はその期待を打ち砕くには充分なほど禍々しい様相で山を登ってくる。

豪勢な椅子に座り、神輿のように見知らぬ人が担ぎ上げている。取り巻きも数人いるようだ。

「あ、あれは『王様の椅子』……」

座った人の命令は絶対に聞かなければならない凶悪な道具。あれを使って近づいてくるということは、王様としてしずかちゃんに命令して体を強制的に交換するつもりということ。

(手伝わせるために現実世界から人を連れ込んだのか。命令が届かない範囲で見つけられてよかった……)

影もこちらを視認したようで指をさしている。神輿を取り巻いていた人々が一斉にこちらに向かって走り出しているのが分かる。

恐らくしずかちゃんを捕まえるように命令されているのだろう。

影の並々ならぬ執念を感じまたもや対話をする気が削がれる。

「行きましょう……」

落胆しつつもこの場を離れるしか手段がない自分達は丘の反対側をかけ下って再び町中に逃げ込む。

「やっぱり会話は無理だよ。もうそろそろ2時間になるからこのままこの道具で逃げ切ろう！」

のび太が取り出したのは『やどり木』だった。これを使うと他人の家に泊めてもらえるようになる。

「のび太さん！ここは鏡の世界で住人もいないから家は使い放題よ

！」
イライラがつのり、自分でものび太のボケに付き合っていられるほど心の余裕がなくなってきているのを感じる。
「あ、そうだった！ ごめんくださーい！」
そんな気配も察することなくのび太は呑気に見知らぬ家に入り込んで行き、一気に奥の間へ駆け込んでいった。
「さぁこれで後は影が消滅するまで隠れるだけだね！」
確かにのび太の言う通りこれで時間稼ぎはできそうだが、何か重大な道具を見落としていないか不安になる。
「のび太さん、効かないかもしれないけれど、ここで『平和アンテナ』を使ってみましょう」
電波を出して平和な気持ちにすることで争いを止める。これを使って近くまで来ているであろう影と対話に挑戦してみるのだ。随分と時間が経過した今、たぶんこれがお互いにとっても最後のチャンスだろう。
押入れの中でジッとして外の音に聞き耳をたてる。周りは静寂に包まれ、一向に何かが来る気配はない。それが逆に不安にさせた。
「……消滅したのかな？ ドラえもんに聞いてみる？」
「いま騒ぐと場所がバレるかもしれないし、消滅していたとしたらドラえもんが夢を終わらせるって話だったわ」
「そ、そうだね。あれ？ しずかちゃん、何か顔が変だよ？」
「なぁに？ のび太さんだって……」
のび太の顔が歪んでいる。
と言うより空間が歪んでいる。
「…………！」
歪んだ空間はそのまま原形を保てず崩れるようにして潰れていき、またたく間に暗い空間となっていった。
「のび太さん……いる？」
暗闇で見えない恐怖感から思わずのび太に声をかけてしまうが、返

事はない。
目が慣れてくると天井には夜空のように輝く宇宙空間が広がっているのが分かってきた。
（何が起きた？ここはどこだ？ドラえもんが移動させた？）
ドラえもんの声はこちらに届かない。見知らぬ人の家の中にいることが危険と判断して、様子を見ていたドラえもんが機転を働かせて移動させたのかもしれないが、だとするとのび太がいないのもおかしい。いずれにしろこちらから確かめる術はない。
「一体どこ……」
言いかけたところで、俺はある道具を思い出し、冷や汗が一気に噴出してくるのを感じる。
地面には６畳のタタミが敷き詰められ目の前には古めいた襖があったのだ。
（これは……『あの人は居間』!!）
過去の思い出の人に会うため強制的に召喚する道具だが、これを自分が使われたのだ。
こんなに適した道具をなぜ今頃になって使ったのか、俺と同じように忘れていただけなのか気になったが、今そんなことを考えている余裕は全くない。
これを使ったのは間違いなく影だろう。
しずかちゃん（俺）は既に影と一度会っているから思い出の人として召喚が成立してしまったのだ。
「くそ！通り抜けフー……」
咄嗟にドラえもんから預かっていたスペアポケットから道具を取り出そうとする刹那。襖が音もなく開き、隙間から大声が聞こえてくる。
「源静香!!!!」
（……なんだ!?）
グン！
名前を呼ばれたと思いきや、急に自分の体が何か大きな力で引っ張られ始める。引力は襖の方から出ているようで体が引き寄せられて

いくのが分かった。

「イヤ～ン！」

しずかちゃんぽい口調が染み付いていたせいかスカートがめくれる際、咄嗟にキモい声が出てしまった。

吸い寄せる力はどんどん強くなっていき、通り抜けフープの中に入るのも困難になっていく。

（何の道具を使った!?『ハイパー掃除機』か？）

瞬間的に『瞬間接着銃』で自分の足を撃ち固定する。これによりかろうじて引き込まれるのを防いだが、吸引は止まらない。

（このままだと……服が破り取られる！）

想像してハァハァ言いながらも次の打開策を考える。

襖の向こうには……やはり影がいることが分かった。そしてその手には金色のランプがキラリと光る。

（ランプの道具と言うと……『まじんのいない魔法のランプ』……!!）

足を固定して動かないようにしたことが裏目に出た。

かなりマズい。

この道具は名前を言われて吸い込まれると言うことを1回聞かないといけない代物だ。命令は１００％体の入れ替えになるだろう。

ここに来て強力な道具を連発してくるあたり影も本気なのだろう。

反対を押し切ってまで貫いた自分の行いを後悔し、弱気になるほどこちらも追い込まれて来た。

（やはり安易に眠らなければよかったのだろうか）

一か八か『ストレートホール』で真下に穴を開け別の場所に自分を落とすか？

しかし、既に名前を呼ばれてしまったので吸引も続いており、接着剤が消えた瞬間にランプに吸い込まれる可能性がある。

考えても自分で打てる手が思いつかず、絶対絶命のピンチと言っても過言ではない状況だ。

しかしそんな中、再び空間が歪みだす。

しずか（俺）ちゃんはまた別の空間へと飛び始め、そして目の前にはやはり襖があったがそこから今度はのび太が登場したのだ。

「のび太！……さん！」
　嬉しさのあまり思わずのび太に抱きついてしまった。
　のび太が『あの人は居間』を自分に使ってくれたのだ。足の接着剤も消えている。
「し、しずかちゃん！ゆっくりしていられる時間もなさそうだよ！ここはさっきまでいた見知らぬ民家なんだけどどうやら影の声も聞こえるぐらい近くにいるようなんだ！」
「そ、そう。分かったわ」
　確かに無人の世界の割には何やら外が騒がしい。２階の窓から周りをソッと覗いてみると家は群衆で取り囲まれているのが分かる。
（うわ……こんなに連れてきていたのか）
　ガタガタガタ
　そして、既に家にいることがバレているのか、玄関を開けて数人が侵入してくる音が聞こえる。
「しずかちゃん、どうしよう！もうダメだ」
「諦めないで！二階に隠れましょう！この道具を使うわ！」
　侵入者達はそのまま家の中をくまなく探し始めるが、１階から突如しずかちゃんの声が聞こえる。
「のび太さん逃げて！」
　突然の声に、侵入者達は声が聞こえたほうに群がるように集まりだした。
「今よ！」
しずかちゃんとのび太は1階に侵入者が集まっている間に2階の窓を開け『タケコプター』を使って家を脱出する。
　追跡は……ない！影の目も盗めたようだ。
「やったよ、しずかちゃん！『おそだアメ』で１０分後に声が聞こえる作戦が上手くいったね！」
　こんな簡単な道具で危機を回避できるとは若干拍子抜けだが、俺たちはそのまましずか家に降り立ち鏡の世界から抜け出すために部屋に戻る。
　後は鏡面世界から出た後に念のために鏡を割っておけば影はこち

らに到達する時間がほぼなくなるだろう。
やはり対話できなかったのが心残りだが最早仕方がない。一体あいつは誰だったのか。ドラミに問いただすしかない。

しかし
安心感と心残りが混ぜ合わさった複雑な感情のまま部屋に入り込んだ俺であったが、どこからともなく聞こえてくる声に絶望へと突き落とされる。
「戻って来ると思ったわ」
「!?」
のび太ではない女の声。まさしく最初に影が発した声と同じ声質だった。
だが見回しても影らしき姿は見えない。
(まさか……)
一瞬の出来事であった。
影は透明の布(透明マント)を取り払うように出現すると、手に持っているマイクに言葉を吹き込む。
すると横にいたのび太が突如、しずかちゃん(俺)を後ろから羽交い絞めにする。
『心吹き込みマイク』
この道具は射程圏内に入った対象の心に命令をマイクで吹き込み、あたかも自分の意思でやっているように見せかける事ができる凶悪な代物だ。まずは邪魔なのび太に何か命じたのだろう。
「のび太さん、やめて!あれは『心吹き込みマイク』よ!強い意志があれば抗えるわ!」
漫画でもジャイアンが何回か命令を耐えていた。強い意志があればある程度凌げるのだ。しかし、のび太はガッチリとしずかちゃんを抑え込み放そうとしない。
「しずかちゃんも影と話したかったんだろう?やっぱり逃げていないで今ちゃんと向き合うべきだよ!」
夢に来るまで散々対話を望んでいたのだ、命令を吹き込まれたとの

び太が気づかないのも無理はない。
その様子を見て影はさらにマイクにボソボソと吹き込む。
ピキーン
マズい、命令された……。影と体を交換したくなってくる。望んでいないのにまるで自分の意志のようだ。
俺はそのまま導かれるように影が持つ『入れ替えロープ』を掴もうと試みてしまう。
だが、先ほど念のため手にかけておいた『スベールガス』のせいでロープを掴めない。
(た、助かった……しかしのび太を何とかしないと時間の問題……)
依然としてのび太はしずかちゃん(俺)を羽交い締めしていたが、この様子を黙って見ていた影が勝利を確信したのか落ち着いた様子で口を開く。
「やっぱりあなた、源静香ではないようね」
しずかちゃん(俺)とのび太はゆっくり近づいてくる影にただただ固まって構えているしかなかった。

１２．未来へつなぐ

「なんで俺がしずかちゃんではないと分かった？」
　俺はのび太が近くにいることなどお構いなしで影に喋りかけた。対する影も静かに語りだす。
「こちらに来て源静香本人とは別の何かが邪魔しているような感覚は最初からあった。それにある程度、現地の抵抗があるかもしれないと彼からも聞いていた。ここまでひみつ道具を使って対策を取ってくるなんて訓練されていないと一般人には到底無理だしね」
　影はさらに続ける。
「それと……あなたがそのまま起きているだけで私は消滅したのに、なぜ敢えて寝てまで私と喋りたかったのか気になった。そちらも話したそうだったし興味が出たから付き合ってあげることにしたのよ」
　一瞬の静寂が走った。影が少しだけこちらの声に耳を傾けてくれそうな気がしたので、俺もこうなったらもう正直に話すことにした。
「気づいていたのか。俺は……君の声に聞き覚えがあるんだ。君は一体誰なんだ？なぜこんなことをする？」
　影は間をジリジリと詰めながら質問に答える。
「時間がないから少ししか答えてあげられないけど、私は未来から来たジャイナと言う。もしかしてあなたも未来から来たの？」
　ジャイナ……。初めて聞く名前ではない。
　やはり俺は彼女を知っている。
　しかも俺はその子と悔いの残る別れ方をした。その証拠に名前を聞いた瞬間、何かホッとしたようなまた会えた嬉しさがこみ上げてきているのだ。
「そうだ。俺は未来から君の憑依が発端となって起きたロボット戦争を止めに来たエージェントらしい」
　これにはさすがのジャイナという影もユラユラとし動揺している様子が分かる。
「なぜ私が過去の一般人に憑依した程度で戦争が起こるわけ!?……なるほど、嘘をついて思いとどまらせようという魂胆ね？」

「いや、本当なんだ。相乗効果なのか分からないけど、君の憑依は結果的に戦争に繋がった。でも俺にとって最早そんなことはどうでも良いのかもしれない」
「言っている意味が分からないわ。それになんで阻止しに来たあなたがどうでもよくなるのよ!?」
ジャイナとは対象的に俺は悟りを開いたかのように落ち着きはらって聞き返す。
「憑依してくる前の記憶を覚えているか?」
「は?覚えているわよ!私は自分の容姿のことで婚約者の彼とケンカしたあげく、勢いで彼が開発した憑依マシーンでこの時代に憑依しに来たのよ!」
ズキン……
初めて聞くとあまりにも現実離れしたお笑い話に聞こえるが俺はこの話を信じた。
狼狽えながらも真実を話しているであろうジャイナの挙動に何か強烈な既視感を持ったからだ。しかし思い出そうとすると頭痛となって頭に響く。
「惨めでしょう?だから私のことを誰も知らない時代に行って、実在した源静香という美女に成り変わるしか私には方法はなかったの!それが彼のためにもなると言われたわ!だからもう邪魔をしないで!」
さっきから出てくる〝彼〟とは一体何者なんだ。聞いているとその男が開発した憑依マシーンで婚約者のジャイナをこの時代に送ったように聞こえる。開発者ならば憑依後にやがて彼女の人格が消滅してしまう可能性があることも予想出来たはず。
そんな事があり得るのか?
ケンカ別れをして憑依マシーンで自分の彼女を過去の時代に葬ったと捉えてもおかしくないやり口だ。
「君は……憑依できたとしても人格がいずれ消滅してしまうことは知っているのか?」
「……!またそうやって嘘で騙そうとしているのね!」

この反応……。やはりこの後、待ち受ける運命を彼女は知らない。
俺はもうこの子に本音だけを語ることにする。
「嘘じゃない。俺も先にしずかちゃんに憑依こそしたが残り時間は僅からしい。今は記憶がなくて君の事を思い出せないが、せめて最後は君を悪人にすることなく一緒に消え去りたいんだ」
「〜〜〜……!!もう時間がない!あなた一体誰なのよ!?」
明らかにジャイナは事実を知ってから思いとどまっている。既に人間の原型を失いつつあり、影が部分的に消えかけているにも関わらずだ。やはり根本的に悪い人間ではないのだろう。
「すまない。俺は何も覚えていないんだ。……いや、天衣酢流蔵という名前だけは最近知ったぐらいか。あとはもう何も分からない。だから……俺がとやかく言うより、結局最後は君が正しいと思う選択をしてほしい」
結局自分も記憶がないからドラミに言われたことを信じて動いているに過ぎないのだ。
また、ジャイナが制圧しているこの状況においては最早彼女の判断に任せるしかなかった。
だが、俺の言葉に影は予想もしない反応を見せ始める。
「す、酢流蔵さん!?……うそ……本当にあなたなの?」
「……俺のことを知っているのか?」
「知ってるも何も……なんであなたまでこっちに来たのよ……!あなたはブスな私なんか放っておいて憑依マシーンを完成させていれば良かったのに!」
「な、何を言って……」
「もしかして……結局私を追いかけてきてくれたのね……。あの時ひどいことを言ってごめんなさい。やっぱり私は……あなたと一緒に生きていたかっ……た……」
そう言ってかろうじて残っていた影の最後の一部分は目元をキラリと光らせると、何もせずに目の前で消え去っていった。

「…………まさか…………」
激しい頭痛が襲いかかり、汗が滝のように滴り落ちる。
自分の中で疑問に思っていたことや辻褄が合っていく。

俺が憑依マシーンを作って彼女であるジャイナをしずかちゃんに転移させた張本人……？

喧嘩した婚約者の彼女ジャイナを憑依マシーンで転送したあげく、結局未練が残って後を追うようにしてしずかちゃんに憑依する役目を担ったというのか？
俄には信じがたいがどうしても思い出せていない記憶と繋がっていく気がする。
俺は未来で取り返しのつかないことをした。
恐らくジャイナとケンカ別れをした際に彼女の容姿を中傷したのだ。そして勢いで自分が開発していた憑依マシーンで『美女にでも成り代わって来い』とけなしたんだ。ジャイナは傷心のあまり未来で生きていく希望を失ったが、それでも天衣酢流蔵（俺）のために憑依マシーンの被験者になってくれた。
そんな彼女に謝りたくて俺はこの時代まで追って来ることを選んだのかもしれない。

それなのに……
謝れなかった
思い出せなかった
もう彼女はこの世から完全に消え去ってしまったのだ。なぜ彼女が消える間際まで記憶が戻らなかったのか。悔いても悔やみきれない。
絶望に打ちひしがれる中、これまでのドラミの行動も理解出来てくる。

ドラミはこのことを知っていたからこそ俺に真実を告げられなかったんだ。
婚約者を消滅させる任務なんて知ったら確実に迷いが生じていただろう。
ドラミは未来のため、俺のために敢えて本当のことを言うのを避けたのだ。そんなドラミを俺は責めることは出来ない。そもそもそんな資格はない。

夢から覚めた俺は無言でドラえもんからタイム電話を借りてドラミに話しかける。
繋がるまでの発信音が一際長く感じられた。
「ドラミちゃん……。聞こえる?」
「……ええ、聞こえるわ。いま未来の改変を検知できる機能を使っているからミッションが無事に成功したことも把握できているわ」
「はは。さすが仕事が早いね。ということはそちらの未来は平和に戻っているんだな?」
「ええ、こちらは戦争前の平穏を取り戻しているわ。清らかな心を持つあなただからこそこのミッションを達成出来たのよ。本当にありがとう」
「清らかねぇ……。ま、取り敢えず俺の役目も終わりってわけか」
「ええ、そうなるわね。そして天衣さん、言いにくいのだけれど、やはりそちらの時代から魂を戻す術は現状では見つからなかったわ……」
「そっか……。俺はこのまま消え去るんだな」
清々しさよりも何かをやり残した未練の気持ちが強い。だからどちらかと言うと早く消え去って無になりたい心境だったのでちょうど良かった。
そんな中、ドラミが重い口を開く。
「……だからせめて最後にあなたがなぜそちらの時代に行くことになったのか全て伝えるわ」
「ドラミちゃん。もういいんだ。教えて貰う必要もなくなった。たぶん俺はもう真実を聞くのが耐えられないと思う」

「もしかして……記憶を思い出してきているの？」
「ああ、何となくね。これは報いなんだろ？せめてロボット戦争を止めたという明確な事実だけを噛み締めながら終わりにしたい」
「天衣さん……あなたがどう思っていようと、あなたの良い心はきっとしずかさんの奥底で生き続け、明るい未来に繋がっていくことになるわ」
「ありがとう。ただしずかちゃんに迷惑掛けないといいけどな……。そうだ、最後にこの時代で一回だけ道具を使いたいのだけど見逃してもらえたりするかい？」
「……ええ。あなたのことだから任せるわ。お兄ちゃんには私から説明しておくわね。ついでにのび太さんの記憶も消しておくわ」

こうして俺はドラミ達と別れ、急ぎ足で剛田商店へ向かう。言わずと知れたジャイアンの実家である。
ただ、用があるのはジャイアンこと剛田剛ではなくジャイ子であった。
もうすぐ俺の人格が消滅しようとしているのか、意識が飛びそうになる。
そして朦朧としながらも必死にチャイムを鳴らす。
（頼む……。いてくれ……）
いつものように公園にスケッチに行っていたら間に合わないだろう。
最後だけでいい。正しい行いがしたい。

ガチャリ
玄関の扉がゆっくり開き、出迎えてくれた子を見下ろすと俺は自然と目頭が熱くなっていた。
そこには懐かしげのある子が立っていたからだ。
ジャイナ……いや、ジャイ子……

顔を思い出せないのに面影がある。
溢れそうになる涙を我慢しつつも、急いでジャイ子の手を取り『かならずあたる手相セット』を使う。
躊躇うことなく書いた手相は〝子孫繁栄〟線だった。これでジャイ子の子孫であるジャイナは未来で俺みたいな奴に巡り合うことなく幸せに暮らしていけるはずだ。
本当に最後の最後だったけれど、ひみつ道具を希望がある使い方が出来た。
しずかちゃん、今まで迷惑をかけて済まなかった。およそ一ヶ月ほどだったけど夢のような体験をさせてくれてありがとう。これからも末永く幸せに生き……くれ……
爽やかな風がしずかちゃんのスカートをたなびかせて通り過ぎていった。

「しずかさん、ボーッとしてどうしちゃったの？」
ジャイ子は呆けているしずかちゃんに声をかけた。対するしずかちゃんはハッと我に返ったようにジャイ子に気がつく。
「あら？ ジャイ子ちゃん、こんにちわ。私なんでここにいるんだろう。何か色々あった気がするけど思い出せないの……」
「大丈夫？ お家に帰って休んだほうがいいよ」
「うん、そうするわね。ジャイ子ちゃんバイバイ」
こうしてしずかちゃんはいつもの可愛らしい笑顔を見せるとそのまま帰路についていった。

未来　数日後

空にはフライングカーが飛び交い、路上は立体の広告映像が映し出されている。そしてその間を所狭しと人が行き交う。まるでロボット戦争があったことなど忘れているかのように活気溢れた光景だ。
そこに一組の男女カップルが談笑しながら歩いていた。
と言ってもほぼ女性が一方的に話しかけているが男性のほうは少し愛想笑いをしている感じだ。
そこに突如サイレンを鳴らしながらパトカーと思われる車両が飛んできてカップルを囲むように着地する。
辺りが騒然とする中、現れたのはドラミだった。
ドラミはそのまま男性のほうに声をかける。
「天衣さん! あなたを重大な時空犯罪の疑いにより航時法に基づいて逮捕します!」
急な宣告であったが男も我に返って反論する。
「あんた達何を言っている? 証拠はあるのか? 私が誰か知った上での発言か?」
「その口調は天衣佐背流(てんいさせる)のほうね。ちょうどいい。証拠も今から見せるわ」
ドラミはそう言うと携帯映写機で映像を映し出す。
そこには口論している天衣とジャイナが映っていた。
『お前は野比家の方と違って本当に醜い女だな! お前のような奴は私の作った憑依マシーンでも使って、誰もいない時代の美女にでも成り代わればいいんだ!』
『何よ! 天衣さん……ひどいわ……分かったわよ! 過去にでもどこでも行ってやるんだから!』
この映像を見せられた連れの女性は青ざめて呆然としている。ドラミはそれに気づくと女性に声をかける。
「あ、ジャイナさん! 落ち着いて聞いて。今の天衣さんはあなたが愛する酢流蔵(するぞう)さんではないの。天衣佐背流(てんいさせる)という発明家であり別の人格なのよ! 天衣さんは二重人格だったのよ!!」
「え……え?」
ジャイナと呼ばれる女性が返答に困っている中、ドラミは続ける。

「天衣佐背流さん、あなたも未来改変把握装置を使っているでしょうから何が起きているか把握しているでしょう。もう言い逃れは出来ないわよ！」

　追求を受けた男はこれまでの動揺ぶりが演技だったかのように、急に落ち着いた様子で喋りだす。

「……くくく。まさかジャイナごときの憑依移動が歴史改変にまで発展するとはな……。酢流蔵も葬れて一石二鳥だとは思ったのだが裏目に出たわけか」

「あなたはこの映像を酢流蔵さんが見えるところにワザと置くことで、酢流蔵さんがジャイナさんの後を追うように仕向けたのね」

「ああ。勝手にジャイナなんかと婚約しやがって酢流蔵は迷惑な人格だった。かなりジャイナに入れ込んでいたようだったので送ってやったのだ！もう二重人格の生活にはウンザリしていたんだよ！俺は憑依マシーンを開発した勝ち組なのだぞ？それなのになぜこの女なんかと結ばれなきゃならないんだ！」

「あなたの事情は知りませんが、憑依先と元の人格に致命的な影響を与える欠陥品であることが判明しましたし、歴史改変が重大な犯罪であることは変わりません。本来ならば即確保となりますが、あなたの体には無実である天衣酢流蔵さんもいます。そこでこれを使わせて頂きます」

　ドラミが取り出したのはひみつ道具の1つである『心つき出ししゅ木』であった。

「これで頭をたたくと、その人の迷う二つの心が、黒と白の化身となって出てきます。その二人が戦って勝ったほうが、強い意志として残ります。もうおわかりですね？」

「貴様……まさか」

「ええ。あなたの発明に対する思いが強いか、ジャイナさんを思う気持ちが強いかこれで決めて頂きます。今回のために少し改良しているので負けたほうの人格は一生表に出てこれなくなります」

「ふ、ふざけるな！この体は俺の物だ！ブス好きの酢流蔵よりも価値のある発明家を残すほうが人類のためだろう！」

「酢流蔵（するぞう）さんは見た目ではなくジャイナさんの心を好きになったのよ！つべこべ言わず決着をつけなさい！」

そう言ってドラミは問答無用で天衣をぶっ叩くと、その場には黒と白の天衣に似た化身が現れる。

天衣が戸惑っていると、頭の中から声が聞こえてくる。

「佐背流（させる）。不便ながらも同じ体で共に共存して行こうという昔の約束は嘘だったんだな」

「お、お前……酢流蔵（するぞう）か？」

「ああ、そうだ。転移の際、丁寧に俺の記憶を消して失敗を狙ったようだが、『ドラえもん』の漫画のおかげでロボット戦争は阻止することができた。このまま完全にお前を封印する」

「黙れ！貴様のような二流の人間に私がやられるはずがない。貴様こそこれで今度こそ終わらせてやる！」

こうして騒然とする街の真ん中で黒と白の天衣による運命の戦いが行われた。

両者一歩もひかない壮絶な戦いとなったようだが、日が暮れる頃には決着がつくこととなる。

そしてその数日後。

天衣とジャイナが楽しそうにデートしている傍らで、ドラミは微笑みに満ちた表情でその様子を見守っているのであった。

完